

部報

IV

— 昭和33年度 —

北海道大学馬術部

序

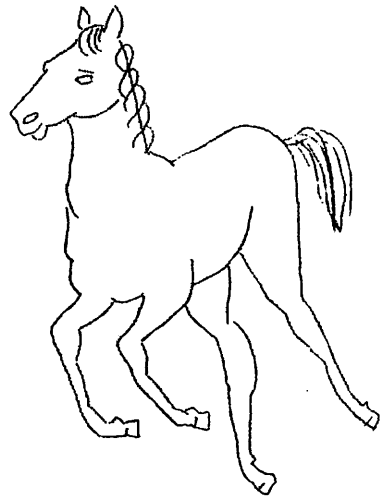
三十三年度は多彩であつた。

悉くどの公式戦に優勝し、国民体育大会、全日本馬術大会で二つの優勝を遂げた。女子の活躍が目まざましい。

だが、多くの問題がある。部の財政、部の存在意義、進むべき方向等、山積みしている。我々は華やかさのみを求めべきではない。馬術を直し、部生活を通じて我々の在るべき姿を求めたい。

雪の降り積る時期になると部費が発行される。部費も既に四割。二の一年を反省するには良い機会であらう。又、親睦を図るうまにもよい手立てとなるのではなからうか。

誓を並べて、更に前進しよう。
来るべき年のために。



目 次

愛にそびゆる高千穂の	岡 本 光	1
未年交の課理	森 本 輝 次	4
基本馬術について	鎌 田 正 人	6
生活の記録	生 田 勝 一	8
この一年間の歩みを回顧して	生 田 山 瀬 子	12
「金の鹿」	大 場 善 明	16
随 想	佐 合 義 弘	18
ホース・シヨウ	佐 合 善 一	19
旅と馬	瀬 田 信 哉	20
馬乗り随想	淺 辺 正 朋	22
生きものの記録	佐 伯 雄 二	24
「十三話」	小 山 義 彦	26
入部当時	森 弘 幸 伸	28
台席の想い出	千 塚 祐 記	29
白馬にて	藤 見 好 博	30
銜 乘	玄 岡 暢 夫	31
昭和33年交戦績	田 中 紀 介	33
会計報告	高 橋 勲	38
困ったシマツクリ	文 要	43
自己雑感	森 田 素 生	44
「或る男」	K 信 次	47
「納屋」	木 塚 信 次	49
「エイラム君の秘密」	門 奈 駿	50
住所録		57
編集後記		65

部内の經濟的な面に關してはごく最近は知りませんけれど、例へば私芝の頃の部費は何らかの形で部員に還元するような形がとられて居りました。逓征費等はダンス・パーティ其の他の部員によるアルバイトからの資金でまかなわれておりました。ダンスなどの、是非はともかくとして、今でもこれは一番健全なやり方のように思います。

斯林にしてその時々、のキヤムテンのオマはそれ／＼にはつきり方針を立てましてそれを善美に実行し成功して来たと思われれます。即ち部としての基礎を確立した時期、これを更に一層鞏固なるものとし部内の結束を強め、他部と比較してと特色のある程部内の空気をあた／＼かくまとまつたものとし、次の段階として社外的にと一段と伸びる気構え、こう云つた風に、部員一人一人の順が確實に歩調を調ふことなく続けられて来たことは学生馬術本末のどのとして途中次第の困難があつたにせよ、立派な一と想います。こゝ、教年同大部内の競技大会で大体ハイクラスを維持し、技術的な面で一応の水準にまでは達したと思われる今日、次に發展する道はどの方向でしょうか。日本の馬術界の中での学生馬術を考えた場合、こゝに當面する問題は、一層難しくなつて参ります。断じて他所の真似でなく北大の誇りなとつてこれを解決せねばなりません。

毎回これに關し問題となる事は部の所有としての馬の扱い方、馬と人間との技術的な平衡、少教精銳か、皆のよく楽しむ部であるか、北海道の特別の地理的な問題等今思ひ付くだけのことな事があげられるでしょう。こゝで一步を退いて競技会での好成绩の聖田を考へてみますと、適切な指導のよとに、かく部員の練習量が非常に多く、特に一年生の後半のレベルが一躍上昇して来た事が著しい特徴で、この基礎から今以上の盛衰が保たれていると云つても云いすぎではありませんまい。何故なら、学部移行後にならぬと大抵の部費は相當の努力がなければ練習の余裕が想われず少く時間には余裕を上げることには初期の練習量が非常に著くからです。そこで更に馬術向上の意気もだし強く、止むを得ず時にはエスけるオマの努力は部にとって最も感謝せねばならぬところとなります。しかしこゝで考へなければならぬことは、オマ、一切が馬ウマで馬ゆゑに他の事から逃避している場合があるとしたら六大学の野球などで論議されると同様、学生のヌルンと云えるでしょうか。それで、と云うのであれば又何か云わんや、馬のみに生きる情熱と勿論尊いには違ひないのです。こう云つたことは例へば競技の増大から逓征期間が長くなつて来ているのにと云えることで私見ながら競技を向引くとか、又は選手の間質制といつ

た事と將來を考へる必要が出ては来ませんか。夜会のある都市に遠いと云ふ事は、この特殊事情なので、今から今迄これを免脱して来たことは充分と見て、今後の方針によつては一步を退く事にも勇気でありたいのです。

勿論自馬を持つ以上、理想は人への調和に於て勝つ事であり、更に芸術の或は高めることです。しかし他校の一部の如く余りに理想論に走る事から、若し馬術部というヒラミンドの底が狭くなつたりくずれざうになつたりしたら部の形は本末顛倒。皆で支え合つてゐる部が皆のたぐひでなくなつたら、極端に云ふは馬キ子以外は寄りつけぬ部になつてしまつたら——勿論馬術的水準の向上を至上目的と考ふるならは、これは当然とるべき道ですが。

要にさびゆる高千穂の峯は浅ら美しくても雲の下がテコホコ、頂上だけのせいのみしだ山と、すぞの方から余裕のあるのびやか交線の山とどちらがよい山か、極端な見方をすればこう云つた事態がこれからの發展過程に問題にならなはいとは云えますまい。かと云つて夜会には参加することへの興味があるヒ云う式の考を方だけでは發展がない事と確かで、多少ヒと無理をせよヒ理想を遂げようとする大體は部内は無気力な空気が招来され自然に衰えてゆくことになりがちです。

好成績があつてこそ、又若気のあつた部は發展してゆくわけですから。困難な場合とはこれらの方点でありまして、所着を如何にうまく調和させるか、一つ新たな方針で一種の發展を期待したいのです。

先輩の方々、卒業してゆく人たちとどうも技術的な面と同様学生馬術の本末のあり方について、こゝで是非考えていただきたい。重ねて申しますか日本の馬術界での学生馬術の占める位置の余りの重大さについて充分考へ、更に馬術がとつと一般に玄い人口に支えられようにするのがこれからの要務と思われまふ。

これほどまでに立派になつた部に向つて私如きが、さうさうに色々な事を書き並べましたけれどもごんたこととこれからの發展、匯言を考ふる場合の多少の材料になればと思ひ、当然の事はかりですが書き並べておまじせ。

頭の大い馬、足のヒヨロ長いヤツと、一オハネるのと、ニスイのとみんな馬は馬——足並を揃えて北海道から、ひいては日本の馬術界をギレイで立派なものにして行きたいのです。

(昭和廿一年卒・農学部大学院)

来年度の課題

森本 悌次

国体聯合馬術優勝隊・旧帝大戦回連覇、東日本二連覇東北北海道学生二連勝、という輝かしい成績、特に国体では自馬で部の正史上初めての成績を収めた前年度の先輩から部の運命を引き継いだけれど、さて、これらの素晴らしい成績を来年度と上は得るかとなると、一寸重い荷物を背負いすぎたと云う感じはどうしてと取り去らない。これら先輩の残した輝かしい成績を如何に来年度と残し、又余裕を考へて出来るか、生田前主将からバトンを受けて四ヶ月、最初はとこと出来るともなないと感じたが、とに角今までやって来た経験から感じだいろく、な問題について書いてみよう。

オート二の優秀な成績を来年度と収め得るかと言ふことであるが、先輩が余りに優秀でありすぎたのをごまかすに上つては全部の防止と云うのは無理かと知れないか、と下にかくある程度の成績は残し得るのではまいかと希望のな観測し、今こゝでは述べ得ない。試合は、その時のコンディションに左右されるのであるから全くやってみなければわからない。しかし先輩とやは

り同じ条件の下にこれらの成績を収めたのであるから最善をつくすつもりである。

オ二に試合の経費である。我々は地理的には全く不利な条件を持ち、以上の試合は全て、遠征によるわけは容れない。(幣玄戦は一年交代で札幌と特玄、東北北海道戦、旧帝大戦は四年乃至五年に一変の持ちぶり、これも遠征以上の経費がかかる)これについてはマネジヤの大場君が書いて居ると思うが、この遠征費の問題は永年の大きな問題となつて居り、昨年は映画ロケという大きな財源があつたが、これは全くの不発の収入があつて、全く現在では行きつまった状態にある。何か大きな試合があると軍内の先輩に負担をかける仕末で、何ら確乎たる財源がない。毎年く同じことをくりかえしては、先輩に對してと迷惑である、これに對して予めその必要なき動きを期待されていた後援会の成立が待たれる次第で、これは一応全国の先輩或いは商社に呼びかけて、基金を得るのであるが、これを先輩のみを待たず、理後と悉く運動して、是非とも来年度からその後援を受けたいのである。勿論後援会のみは頼らないで、我々として出来るだけのことをしなければならぬ。

オ三に自馬を若返らせることで、昭和二十九年の国体の払い下馬である現在の馬は、いづれと老令馬と

なり、最も若い馬で十二才、北斗北澤は十八才になま、これではあと長くて二、三年で疲馬にしなければならぬ。これと経済的な理由、飼料関係、或いは学校の馬(國有財産)等、種々の理由で入れ替えることは困難である。しかしこれも経済事情が許されれば他の理由はどうにかやり繰りするのではないだろうか。ここに又我々現役の方ではどうにかならない大きな課題が生じているのである。

才四に部内の厩舎に就いてある。元来馬という動物を相手にする馬術部は、運動部として特質な性質を持つていて、他の運動部と異り自分たちで馬の飼育管理をしなければならぬ。そのためには正月でも当番を休む訳にはいかぬ。又その反面団体意識ではないので、一人でも練習が出来、単に馬を乗しむという部員の存在と許される。こゝに部員上の大きな問題があると思ふ。私は七月の總會に於て、対外的に優秀な成績を収めると同時に、又単に馬を乗しむ部員の存在と認めて乗しくやりせいと云ったのであるが、以て実際上部の厩舎に當って、常にこの問題が存在するのを感じた。

部に入つて二ヶ月位すると、大体熱心な人、そうでない人との差は出来るが、試合が近くなるとう人の明瞭上熱心でない人の進化練習参加を急務とする、又、依

業当番と部員に對して平等に割り当てる、又何分馬を自分屋で管理している関係上、常に乗つていて部室に寝を出す部員に對しては何でもないが、そうでない部員に對しては女性めな規則もある。どの他いろくの不満もあるようだ。これは誰しも感ずるであらう。(自分として一年目の頃は感じることがある)しかし自分が実際に厩舎したとき、これらのことは馬を厩舎部員自らの手で飼育管理していく上には最少限までのものであると思つた。だからこの問題は馬術部の性質を考へれば誰でも納得するのではないだろうか。又、我々の先輩は、我々以上にこれをやつて来た。運は馬に對する愛情の問題だと思ふ。

次にティーム・ワークの問題であるが、これは既にやつているのであるが、まだその効果は上らぬ常に一才的、天下り的な總會になつてしまふ。役員会に於ては可成り効果をおぼえているのではないかと思ふ。今までの部の厩舎が比較的天下り的であつたので、部員の意志も反映させるためには、とつと部員總會等で部員が活発な出席の必要があると思ふ。勿論最終的な決定は主将が行うが、部員の意向というものをきいて厩舎していくことがティーム・ワークがよくとれる部になるのではないと思ふ。又總會前、或いは時折役員会を開いていろいろ相談することもある意義だと思ふ。

以上取りとめなう二とを盡すは、たゞ部を以て
運営したいと云う事からで、とにかく部がよゝこの事
成をするのは、部長の技力と先輩の後援がなくてはな
らない。先輩諸兄、部長諸君の御助力を乞う次第であ
る。

(主将・製糖部(林産)三馬)

基本馬術

について

鎌田正人

部が復活して滿七年、幾ほどの活動もようやく軌道
に乗つて来ていると同時に、日本馬術界全体のレベル
の向上とパラレルに、又はそれ以上に北海道の馬術界
を代表する我部の馬術と進歩向上しているものと考え
ます。しかしながら多くの意見が出て、その講習等に
於て聞かれるのは基本馬術のなっていないといふこと
が一番多かつたと聞きます。それでは基本馬術とは如
何なる内容のもので、どの程度までになれば基本馬術
が出来たと言えるのか、この点について私なりの考え
方を書いてみたいと思ひます。

物事に習熟するのには始めから教習より手を取られて
成るより、その道りと反覆して上達する型と、我流
でも究むる大いに個性をつんで成るレベルに達する型
と二通りあると思ひます。今、例を野球にとつてみれ
ば投球一つにしてその球はこうにぎり、足はどの位に
開き、体重をどの程度にこの足にかけ、手はどの角度
で、腕を云々……等と云うでしよう。しかしながら
野球選手のフォームは百人百様で一つとして同じでは
ありません。それは現在のように普及している小さ
い時から球をにぎって自己流の型を成る程を作り、そ
れを改良したものだからでしょう。そして野球のよう
に進んだスポーツではきつとこの各々のフォームに對
しても説明しうる理論が完成しているのではないかと
考へます。日本の馬術が軍隊を基盤として発達した
どの影響が今に残っていて、一つの型にはまらぬと如
何にも基本馬術が出来ていないと批評する人が多いの
では無いでしょうか。そして言っている人自身も現在
の林下録に教習と云らず、馬と充分でない状態に於て
どうすれば、乗馬の基本が完成出来るか、その方法に
ついては何の意見も持っていないのです。精々若しか
つた想い出して登上げをやらせると言うのが関の山でし
よう。拳をこらひねり、この脚をこう使い体重をこう
移動するはこの運動が出来るとだ、と言われてそれを

調教の出来た馬でやって形を覚える。その事自体決して悪いことではありませんが、良い事なのです。しかしそれだけでは本質的な進歩にはならぬと認めます。その馬が或る運動が出来た後には進歩には調教者はあらゆる技巧を用いて居ります。しかしそれが単純化されて来ると、そのうちの主なる一つ又は二つがそれと當てはまると凡そ或る運動の型だけはやるのです。――之に馬術をやる者が大きな誤ちを犯す危険が存在すると考えます。きつとこの時基本馬術が身についたと又は身につけていると考える人が居るからです。それは或る方法で扱わざるは誰か扱げるとカースマヤードロツクが出る球を扱げたと同じことです。決して我球の基本が出来たものでは無いのです。それは球を扱った人の口ホットなのです。基本馬術とはどうな取右にぎつてと少くともマヒードホール位は扱げられるようにしよう球を扱ふ力が出る程であり、目標としては更にカースの球を扱つて扱げ、その扱れをよくして、廻られる球の動きを芸術の域迄高めねばなりません。

それでは一体何をいつて基本馬術と言ふのか、一言で言うならば、完全な馬上の平衡、拳の独立、及び差力を推進し出来る脚の力の三つだけ考えます。平衡がなく馬の上にある事は出来ません。それはしがみつ

だけですが。しがみつきに平衡は全く無いのです。それから鞍上や練習するのにも笑して膝でしめつけて馬上に安定するのを覚えなすためのではなく、よりよい平衡を導くための手段と考えて良いでしょう。鞍上にはこの内股が硬直する位になつたと言ふ時、それは破れんとする平衡を出たの壘骨上にとオために使われたのでなければその人の練習方法は誤つた方向に向つていと考えましょう。良い騎姿は柔軟な身体より発する平衡により獲得せられ、少しごとしがみつきの微かあれば硬い騎姿となつて現れるでしょう。鞍は平衡を助ける道具です。之して拳の独立、差力を脚と平衡より生れるのです。馬の前進する力は全て手綱を插つて拳にもいつて来ます。脚がアクセルとせば拳はブレーキであり、ハンドルでもあります。術は敏感な口内にあるものであり、拳の微妙な操作は大きな影響を馬の運動に現わすのですから拳が体のその他の部分の運動に影響されたり一筋に動揺してはならぬのです。拳の感覚、及び操作は馬術の最も困難な課題の一つで、至腎本重、脚及脚の操作と一筋により馬術を向上させるための手段をつとめます。拳の独立が相當に出来たら或る程度基本馬術は出来たと云つて良いでしょう。フイリスは「推進、推進、之して更に前進」と言つて居りますが脚の力もこの重要を推進を司るとのなのです

から後方には適切に使用されねばなりません。勿論膝力なだけでは馬術力で微妙な操作と出来ねばなりません。だが、常に言った口ホットではなく、よりよい求を依り上げるためには必要に応じていくらでも強く使える力を持ち合せてなければなりません。乗馬の騎乗法は人馬の奔走を主眼としたものですが、馬術は重心の一致による人馬の平衡の上に作られるのですから、脚、拳、それに体重、騎座と馬に何かを感じさせる全てを利用しているのです。そのため一つ一つが直立して他と無関係のものではありませんが、平衡、拳の直立、それに肩を内へする位の脚力があれば、概して基本は出来たと云えるでしょう。そしてこれは百練自得、練習あるのみです。

教師が居らぬから基本馬術を尋ねることは出来ない筈と嘆いている時代ではありません。しかし幸なるかな私共は最高学府の学生の乗りです。原理を考え、その変化を研究し、何を理想とするかを語り合い、現れるものを批評し、日本の馬術界を指導う救うに励むものとしての気魄をもって進もうではありませんか。私自身このうちの大部分をマスターすることが出来ず、唯好きなこととその興味さと美しさに魅せられて乗っているだけです。

御意見がありましたら一紙に大いに語り合い研究致

さうではありませんか。

(技術顧問・昭和卅四年・学士入学・獣医学部四年)

生活の記録

生田 勝一

入部した年に創刊された部報とすてにオ四号を数えるに至った。馬に明け馬に暮れ度らに死ぬらに務まされた四ヶ年がまさに夢のようには過ぎ去った。今部報が四号の発行に際し過去一年を思い起すに、あまりにも充分に責任を果し得なかつたことのみ多く、漸愧の念に耐えない。その志進んで事に當ってくれた部員諸兄に深く感謝する。

しかし僕は、で単なる前年受回顧を企てようとは思わないし、又事実在期満了して約半年、過去は全て老嘆とした、何一つ際立った事象として想い浮かない。更に最近部報を讀める変に強く感ずることであるが、今や吾々長白参は腹にして老矣と化しつつある。

四年間吸いなれて来た空気がとは澄んだ若々しく新鮮

な気が揃ち揃ちているように思われる。前年夏の構想であつた部内結束の進化も、僕の悪感などは引付に新世代の手で充分に達成されている。益々苦難の道を築めて行くであらう馬術部の存続と発展と言ふ大事業と彼らの手なればこそ差違されるのと確信する。老兵は老々若きゆくのみ、今さら何ら言ふべき言葉もない。さればこゝで一部署としての吾が四年間の馬術部生吾の記録を纏つてみようと思ふ。

生来僕は動物に非常な愛着を感じて来と。記憶にある限り常に側に生きものが飼われていたといふ僕の生い立ちの環境がそうさせたのかも知れぬ。彼ら動物たちの柔かくあたたかい毛並、純貞なつらな瞳、しきりによく動くその身、つめたい鼻先を僕はゆまなくいとほしく感じ、愛しているだけで胸がわくわくする。彼らがおもねること、さねる、ねむること未知らば、利己欲、名譽欲、悪賢いこと羊々人同社会のみにくい競争の一切の要因を待ち合わさないからだ。

僕にとってにはたゞ彼らが側にいてくれることで充分な慰めとなつたし、彼らのちよつとした甘える素振りには僕を有頂天にさせた。僕の孤独な内面的な愛情がその対象を彼らに求めたのかも知れぬ。馬術部への入部の動機も又四ヶ年の徳蔵の垂田もたゞにこの為であつ

た。されば、僕に比べてスポンジとしての馬術はしばしば副次的なものとなつたし、時に以て吾が愛する馬たちがその意に反して厄介な物を背負われた苦難を惹きられるのを哀れにも思ふことすらあつた。何かとんでもない悪争を働いてけるような氣にすらなつた。

しかし吾と人の子、一人前の征服欲も持つたし、救済することの喜びも味わひたかつた。その上穿つぱい競争心、差違心と加わつて、それらがなるとか上等の馬乗りにならうとする意欲をかき立てた。だが僕にとつては馬上の世界は全然異つた生吾の一面である。一、二年経て愛馬に益々深く情が積るにつれ、馬上にある時よりむしろ馬を愛し、たてかみを、尾を梳つている時の方が愉しく思われた。ホヌラ並木で笠を追いながら彼らがしまさうに草をかんでいるのを望んでいる時の方がだのしく思われた。甚しかるべき当惑も草刈りと寝むら壁も牧草種も、それ程若くとは思えなかつた。すべからく隨處は七色の虹の枝がつかす吸ゆくと言ふほどの愉快なりとは思えない。

入部してからの二、三ヶ月はさすがに容易には馬たちの側へ寄りつけなかつた。そのいかにと硬さうな蹄ととの下にいみじくくつついている光つた鉄、後肢の敏捷な動き、スラリと並んだ大きな齒、益々たくま

しい下類、は奇矯な番ニ才を凝練するのにはた分だつた。彼らとの最初の対面は今尚脳裡に生々として残きついでいる。四目の中旬、クツキリと澄みわたつて朝晴れのざれ吹かぎつてひさしまるよきな寒さを感じさせる早朝、白い息で手をあた、めなから胸をときめかせて魔舎へ出向いたとのに。

奇妙にも六頭の名馬のうちエリサベス嬢とトクシマ嬢の二頭の印象が特に深く何故か四年間彼女たちに強い愛着を感じた。

エリサベス嬢の純白の鼻白と四下肢は上体の社及び水かた栗毛色と調和して凛然とはげ、その円く大きな瞳は可憐の一語につき、まさに自然美の極致をなしているように思われた。だが監型の皮肉かいたずらか、鼻先で小さく左にぞれた鼻白は実に受容に富み、親しみを感じさせる。

二れに及しトクシマ嬢の切れ上った目、高くまいたみね、鋭く横に張った脛骨、硬く短かい尾はいかにも神経質な野性的な愛さを感じさせる。特に不愉快を感じてお跳みはね、腐って必死の抵抗を試る時のその双眸はらんく、と輝き目尻はいよく、鋭くはねあがり、眉をつきあげ狂気を感じさせる。僕はどの野性下種くみかれた。彼女に持した最初の動機には自分にも不飽などのが含まれていたかと思れなかつた。しかし彼女に

融れ、彼女に語り共に出してその生々しい野生味の奥に一層の純情、素朴さを感じた。苦しみにつけ悲しみにつけ彼女たちは常に僕を慰め休めさせてくれたものだ。

幸か不幸か対外試合は一年の後半からその機会に恵まれた。身成の世界で又喧つた夜渡をあげることも出来たように思っている。

僕には今尚馬術そのもの、興隆と女興隆さと言ふものは到底今をいかに対峙身長の瞬間の興奮には他の人なすホーツ身成にも見られぬ敵しさ峻烈さと言ふものがあるように思う。それは馬と騎手との斗争の場であると同時に知合の場でもある。多論他のスホーンと同じく勝負の判定ははつきりとしかど冷睨に下される。クーベルタンのオリンピック精神が理想では理解出来たと事実として身に感ずる点にはあまりにも感いへたところがある。勝利の歡喜はその動機が単純であるだけに一層熱烈な喜びとなり、敗戦の苦汁は体内にのみくまわり意気銷死し、深刻な悩みを味う。母々の勝利に灵感なる血潮はわきおとり、青春のありあまる熱情ははげ口を夏出してほしり出で、数戦の一つ一つが強い叱咤の鞭巧となり意氣ある教訓の教々を授けた。

部長としてフリーに飼育と乗馬を存分に樂しめたい
か、か一年足らずであつたことは今にして思ふは殘
念である。讓せられた任務を満足に遂行し得たわけ
はないが、特別の責任を讓せられてしまふと何か常に
脅かしにこりかあるように感じ、勝手気任に振舞ふな
つたように思ふ。元來僕は比較的内向的で人間欲い
方である。他人に物事を頼んだりするのはからさし
不得手であり又他人からとやかく指摘されるのを嫌
い。何でも自分でやってみなくては気が済まない。そ
の反面引つ込め思案で自分の意志をすぐ行動に移すこ
とがいつと躊躇された。この偏屈な性格的な気性とい
ふ間の貴重な部活動で相当匡正された。今さらのよう
に思ふのだが、三、四十人の人間を一つのサークルと
して統一し更に卒業の余暇に自馬を六頭と七頭と繁殖
すると云ふことは実に並大抵の仕事ではない。この大
変な事業に加きて部活動として林々な行事を計画し主
催しなければならぬ。当然古参部長の一人一人にあ
る程度の外支手腕、社交性とか、圖畫なる判断力、然
然たる決断力、迅速なる実行力等が要求されるわけ
である。僕には何一つ満足なるものはなかつた。しかし
どういった空気のなかである期間生活出来たことは僕の
將來にとって実に計り知れない大きな効果をもたらす
ものと思ふ。大学生活に於て單なる知識の授受という

ことよりもとつと大きな課業であるべき人間性の涵養
が馬術部を通じて為し得たものと思ふ。

而しなくといつて四年間の生活を聞いての最も大
きな收穫は多くの類としき先輩に恵まれ良き後友に逢
い同等の士気と知り合つたことであつた。趣味を、
目的を同じうする者の集いには他の社会に置られる獨
つた雰囲気がない。作爲と虚偽と狡猾な知恵もない。
とこにも不純の入り込む余地がない。然れば同じ敵
にみたり、苦しみを分かち合ひ、互いに慰勞し激励し合
ひ、人生を語り合つた朋友こそ千金の価値と及ばざる
のと云ふよう。

さて處にもつかぬことを長々と書き綴つて、後々
の語り草として部長の一人に馬術よりもむしろこの雰
囲気に酔ひしれける者のいとことを知つてもらはばそ
れでよい。

吾らが馬術部のより一層の發展を祈る。

(前主将・經濟学部四年)

この一年間の

歩みを回顧して

片山 静子

女子部員としてこの一年間は非常に慌しいが又それだけ楽しくもあり、十分意義あるものだったように思います。

昨年の十一月、福島で行われた第三回関東北女子馬術大会に、女子部員として二名初めての参加をする。その結果は私たちが決して満足出来るものではなかったが、何と云っても初めての対外試合でもあったから、参加することそのものに意義があり、技術、交流面等の種々の收穫を得る。又、あちらの笑顔を目前に見て、まあ、この程までならと密かな安心感と自信を得たわけで、この大会をして私たちの心を鼓舞したことば、否定出来ないと思う。そして八月の女子蹴へと二きつけたわけだ。

四月には入学式と同時に新入部員並びに馬術講習者

募集、及びそのパレードを行う。稽留での大会後、北大主催の女子馬術大会を開いたことの話しも出ていたので、大いに女子部員を入れるべく宣伝と兼ねてパレードに参加したが、男子ばかりで一向に女子が現れない。その後、講習会に四人程参加してくれて、ほっと一安心する。私たちが一応この道の先輩として大いに表切り歓迎したのは良いのだが、此処に一つの壁に直面して当惑してしまふ。と云うのは、女子部員専用の部屋がないこと、強いては更衣室すら無い事だったので。今迄は人数となく、時たま乗りに来る毎に未だかい鬼いしながらと此処まで来たわけですが、後輩の串、将来女子部員増加の串等考えられるので、どうしてと部室の必要性を感じたわけです。今考えるとおかしい位身剣に皆と相俟した結果、只今の部室借用につき謝状書の草紙まで書き上げたが、幸い公けにする必要もなく、文日頃やつと部室が得られたわけです。中を御覧になつた方はおしいと思いますが、それまでは物置以下であったのか、臨時大工、技術者がイナード等々、男子の才々の期待以上の手助けによって、気持ちよよい一室となり、改めてこゝに感謝致します。

その後、部室は出来たものの、新入部員がさっぱり来りに見えないので、親睦の意味で白馬牧場への計画

を立てたが、各々の都合で夏休みには赴くこととし、我
れぞつたかとも知りぬが、女子だけの衝乗に切替える。
けれど馬車の関係、更に新入部員の解散の事と考へる
と少し無理な様だつたので、一人の才に慮慮してとら
つたが、結果的に旧部員の結束は固められたが、あ
まり意味はなかつたと思う。

入月の初め、決めてあつた日野へ出掛けたが、仙台
で行われる東北大、北大定期戦及び女子オースン戦の
ため、ゆつくりと出来ず、直ちに練習開始に入る。十
一日札幌を發ち、十三日仙台で試合、同日東京での帝
大戦施設名目で車中の人となる。仙台での試合は特別
すべき点がないが、一つ残念な事は、途中から病
院に行つてしまつて、あちらの女子部員と親しくなれ
なかつたことです。十五、六両日の帝大戦はこれ迄受
くの試合を見えていないだけに、本當に試合らしき試合
を多量で、感激の申しきり、又あれだけの物を優勝
してなら大いに満足感があること、加えてうらやむ声
しきりで、大いに勉強になつたと思ひます。

高校後ゆつくり休む暇もなく、二十日から女子戦の
強化練習が始まる。北大主催の上、今日本女子学生馬
術大会の如く盛大なものであるから、一回夜れも
忘れず張りつたのだが、試合日近くになつて不参加の

通知が来、学園大、慶大、うちと三校になつたのは
御承知のことです。特に東北大の不参加は私たちに一
番のツギ、前述の二校とは、かまつて諦めの強さ
で試合に臨むわけです。ところがその結果は予想す
らしなかつた優勝の名をいれたツギ、それだけに私たち
の喜びは天にたとへくばどつたでしよう。

次いでこの間の十月二十六日、福島での第四回関東
北女子馬術大会に四名参加する。今大会は二連日の参
加で、前大会の勢いを駆つたと云うわけでもないが、
青山学院大をふるまひ、一位、二位を獲取る。

以上がこの一年間の足跡ですが、種々と問題がある
と思ひます。先ずオースン、あとに競く女子部員がいな
いと云うこと、これは大きな問題だと思ひます。現在
四名しか居ず、一年目にもスラニクがあるのは、来年は
まだよいとしても、毎年北大主催の大会を断つて行く
とすればさびてくることです。春の講習会の折回れ
程新たに入部して七八月頃迄名をとめていたが、そ
の後止めてしまつたり、不運になつてしまつています。
又、十月に女子部員を募集したか、肺期のせいもあり
一人とその後入部していません。
これで私たちが心配して種々と考へてみた結果、直

衣次定りない面もあるが、受入れ本勢としてはこれと云つて不備な点はなかつたと思ひます。又、或る男子部員は、途中で止めたりするのは横らに何等かの責任があるのではと、心配して下さつたが、その様な事は考へられないので心配なさらないように注意し致します。かまつてその非は私たちにあるのではないかと思ひます。講習会、又その後しばらくは、雑か、出てまていたわけで問題はないと思ふが、春期合宿、定期戦等の間のスラング、更に試合練習等による怠慢と多忙とで、新しい方々と親しく連絡がとれず、二、三日引續つてこれをかつたと思はれます。

今までの例から考へられる原因と条件
イ、馬術そのものについて

今後の馬術は格調の高いスポーツとして、玄く人々に親しまれるものとなるが、何と云つてもまだ一般スポーツとは異なり、デニス、ヒンボーン等をそのと同じようにはいかす家族の反対も考へられる。やはり馬が好きでか、興味を持つているとか、進んでいらして下さるような方でないか、説けて行けるかどうか疑問ですし、又他のクラスと比較すると傷害可能率も大で、こちらから無理にす、めかねる点。ロ、時間について

午後の練習は授業その他の都合で種々制約され

るので、結局朝の練習に頼ることになる。それで、男子が練習場が長く比較的馬場に近いのに對して女子は自宅通學者が殆んどで、時間にも間に合はせざるには差障り時分に出なければならず、大変である。又、札幌以外からの方は、云うまでもなく朝の障得練習は出来ず、時たま乗つて気分を乗しむなら良いが、やはりリカシ無理に廻られる。この点については、白を一回騎乗にして時間をおくらすとか、朝の障得練習を週に一回位は午後にもわすとか、考へねばならぬかと知れない。

ハ、部費について

公然と耳に入る事は、部費一ヶ月二百円が高いと云う事です。確かに他のクラスと比較すると高いに違ひないが、馬を養つていゝ事を考へると当然のことだ、かまつて他校のそれと比べると非常に安いほどである。が、ちよつと乗つて気分を味わうには二百円は少し高いかと知れない。まあせいぜい、数回乗つていたゞくより他ないが、正部費として、はななく、特別部員を宛めて一回につきいくらく徴収するのと思はれたいと思ふ。

二、其の他の部費について

部費のことはまだ良いとして、服装その他に出費がある事で、并に今回はこちら主催の女子戦が目

前におつたため、少しみづいたのでは、と心配して
いる。これについては部の会計の許す限り、誰にも置
けず、うわけにはいかないが、一區りは準備として準備
しておけらうと思ひます。

以上、このようになつておると思ひます。

オニに女子部員の試合参加及び女子戦の件について
これまで大小四回試合と名の付くものに参加したわけ
で種々と考へるべきものがあつて思ひます。

イ、対外試合への参加

女子部員は人数が少くない関係上、ほとんどが選手
として参加する事になるので、参加資格と云うべ
き実力の有無の問題、又、大会の規模は男子ほど大
きなどではないが、それに伴う旅費等の問題が
あるが女子部員發展のことを考へると、先ず参加さ
るのには意義を置くべきで、勝敗はオニの問題にと
なる。前述したように、昨年の福島に於ける大会
への参加の結果は女子部員を奮起せしめ、全日本女
子学生馬術大会開催の試み、長らく同大会の、更に又
関東北女子馬術大会での優勝へと導いたと云われ
よう。又、大会を通じての勉強も大なるところがあ
るので、出来得るなら種々の大会への参加、更に選
手としてなく、行つて見るだけでもよいと思ふ。

ロ、女子戦について

馬術は男が別にするのでよいと思ふが、実力
が男子のそれと対等出来ぬ限り、他に女子戦を持つ
のと致し方ないように思われる。

私たちにいつては、此れ主催で女子戦が開かれる
事は、練習をする上にと佳気分を養ふに於てなく
目的と云ふか、要合いと云ふか、一つの乗り
が加わつたわけだ、又女子部員發展の爲にも大いに積
成する次第である。今回の試合は摺磨で食べたよう
であつたが、毎年主催で開くわけであるから、当然
なからその運営、計画面等女子部員の手でやつて行
かぬならぬ。これに關しては女子部員がある程
度いなければならず、新入部員の確保にかつて未
だるわけだ、更に女子部員の増加に伴う重宝もスト、
先陣の援助等、種々と考へねばならぬ点が出て来る。
今回は初めてであつたし、何やら判らぬまゝに試合
に臨んだわけですが、今後はこれらに關する話合ひ
相談の機会を感じます。

其の他、種々と問題はあつて思ひますが、皆林の
御意見、御定旨等ありましらう、幸に思ひます。

(女子部長・文学部(英文)三年)

金の盡

大場善明

諸君、金の盡、と書いてと決して、裏表の土の中
から掘り当てた「ニ、ほれ、ワンク」のオハナシで
はありません。金の盡、無争焚語をトツペらな
った秀才揃いの諸君には、すでにわかっていた
でしょう。即ち私は、この言葉を金の盡、と発音す
る所なのです。

この夏、現ギヤツの森本さんの至上命令で、
私が前マネージャー、田中さんよりその任を受けつ
ぐことになってしまつたらしい。「らしい」だなんて、
部員の諸君には、誠に失礼な言い方かも知れませ
ん。しかしながら、現在、實際の所、君などのその職務を、
田中さんにやっていたゞいてゐるからです。誰かが新
在当時、吐く言葉のようですが、私にと、そのマネー
ジャーなる重任を一人で頭上には余りある現状です。
何事と不馴れなものですから、全て教習に奮励、良き
御座験の持主であられる田中さんがどの元締めをや
つております。「二人な事じやいかん……」と思つた
すが、何といいまして、実かはいかんとして進い所

です。そのため、部員の諸君、特に御本人の田中さん
には夏大の御迷惑をおかけしてゐる事と慰みます。形
式上は、一応バトンを私の手に移されたものの、一本
自分で、右へ走つて良いとのやら、左へ走つて良いと
のやら、いざ、か戸感つております。背後で現存つて
いてくれる田中センセイは、喧嘩、私の走り振り、
ヤキモキしている事だらうと思つたのです。ですから、
バトンを手にしてから、とう三ヶ月にもなるのに、い
まだに手をとりに、足をとり、田中センセイの伴走を必
要としたり、本当に世話をやける後輩とお慰いになら
れてゐる事でしょう。先程と述べましたように、どう
三ヶ月となり、赤ん坊でいうと、百日目のお祝い
のある頃ですし、そろそろ私と赤ん坊から脱皮しまし
て一人歩きをしてみようと思つたのです。しかし、目
に入つて来る全てのこのかわらぬわしく、不可解で、時
には、全く手と足と出ない場合があるのです。

高橋時代に、運動部のマネージャーといへば、素外
（身は、スノブル……）運動神経の鈍い奴で、恐ろ
ほどの練習には出て来ない人間のように思つてゐたの
である。（この辺は、現下二の私にと、ヒツタリして
いるかと知れませんが……）、又、新入部員のかき集
め、奔走したり、他の学校との試合の打合せをしたり
一寸した遠征試合等があれば、いつか々々で勝手ヒ

齋に旅行して、試合にでも勝てば、送手と一着に大いに食えるものだとばかり思つておりました。所がギンチヨン!! 全てはさうは行かない。特に、その名、全国津々浦々にこだまする。北海道大学馬術部とあつては、一着の幸。何今、却變といきば、オヒズの生きたコワイ、オジサン・オバサン(ハ)ハメロリ。やる事、なす事、全てが「俺達ア・子供ジヤネエ!!」とばかりやられるものであるから、「オ、ト、ナ、シ、ク、シ・デ、デ、ネエ」と、一。田や、二。田のアメモでたまさうたつてさうは簡単には行かない。それは、あらゆる機会に合せて送手を送り出してやりたい。しかし、何事やるにしても一番気がかゝるのか、手前夫のフトコロ。何せ、一。夢、道外へ一チームの送手田を送らうと思ふは、シスカシの聖徳太子。ホ、五、六枚権んで行く。却變の送手聖徳の馬頭で曰く「一人、一人の我々の代表の親が、聖徳太子の親に見えてしようかネエナア……」と。これら数名の、聖徳太子は、全て体育会予算、部費等の一般会計収入以外に、その収入源を求めようとするのであるから、大変なものである。即ち、マネジャーになるのは、これら送手を天山、中央に送り出し、より良き成果を上げるに帰つて来られるのを期待しながら、日夜、そのヘンクリ作りに頭を悩ましているのである。それだけではない。

幸災となつていゝ現在、我々を表して、金の盡、即ち、マネージャーと呼ぶ所以ではないか?

今ニースンは身分と支出の差かつた年と思ふ、しかし、そんな幸にはかり気をとられ、その遠征の夢毎に華々しい成果を上げておられる芝華を忘れていたのでは、ちようど、バラのトケを奪れて、バラの花の美しさを忘れていゝのと同じではないだろうか。まさに、現在、北海道大学馬術部の黄金時代とよんで決して固言ではないと思ふのだが、諸君の御意見はいかに? 全国にアマタ数ある大学馬術部の中に我等北大に對峙し得るものなし、と嫉妬しては少し時期尚早か。しかし、とら一ヶ月とすると、それを如実に示してくれるのと、ふしつかな後輩の我等夫隊さんは期待してゐるのである。このようなまことにその絶頂期にある我が部のバックボーンたる財政面では突に淋しいものなのである。しかし、一矢は折れども、十矢は折れまいのである。却變全体が一丸となつて暫々、我等北大馬術部の隆盛を極めるよう、諸君の御力をおねがいするのである。勿論、これから残された数ヶ月、私個人としてとはすかしくない足跡を残して来たい。あらゆる努力は惜しみなく振り、しかし、この私一人がいかに力んで来たところで、諸君の御力をなしには諸君の熱心な御支援に頼れた馬術部とするには、必ず不可能と思は

れるのである。私は決して。金の盡。じやない！私を
ひっくりかえしてと、一文も小判は出て来ないのであ
る。より積極的な諸君の活動を期しなから、未だこの
栄ある馬術部の伝統を堅持して行きたいのである。
金色の空からは粉雪が舞い降りて来る。とう冬だネ
本日に、金の盡。でと暮ちていないのかネ。

(マナージャー・文学部(史)二年)

随 想

佐合義弘

初めて馬術部の部報に投稿するわけですが、私は筆
を持って原稿を書く筆は包丁を持って料理を作るよう
な天にはいかぬ、何を書いてよいものやら、とにかく
筆にまかせて書いてみます。

私と同好会に入会したのは今から二年とちよつと前
入会した動機は、芝草馬が非常に好きであつたという
事以外には何とありません。ところがだんく、と韓教
次増すに従い、どうせ馬に乗るなら一變は何か愛技に
出場してみたいという野心が湧いて来ましたが、生れ

つき運動神経が鈍いのかサツパリ思うように馬が動か
せない、そこで又考き方を本系に決して、馬を可愛が
ってやるだけで満足だと思つて来ましたが、

今年私の愛馬である、北槍。が国体に優勝して来
て、私にとっては何だか私が優勝したようなうれしい
気分です。それと同時にあの夜勝会の時の天山のト口
フイーを思つて、北大の馬術部が名実共に全国的なトッ
plevelになつたことは、同好会の一員として心から
喜ばしい事と思つて居ります。またこのlevelをこれ
から未長く守り抜き、より一層發展してほしいものだ
という心と類つてやみません。また馬術部の技術的
向上と同時に、馬を可愛がり、馬を大切にすることと
十分に心がけて行きたいと思ひます。私は白鬃馬の面
創を思ふ事が出来ませんが、当番をする部員諸君の白
鬃の御苦労は大変なものだと思ひ、私は私なりに出来
得る限りのことをして来ましたが、まだこれから努
力したいと考きて居ります。

誠にまよまりのつかない筆を盡きました。これか
ら馬術部、同好会の發展のためにお互にカンバリまし
よう。

(北大乗馬同好会幹事・北大生役勤務)

ホースシヨウ

齊藤善一

十年陸手という言葉があります。何事と始めて十年たつと上座に差はあるとしてと何か役に立ついい事を云うものだと云われます。私か馬術部員として練習を始めるのは馬術部が復若しと昭和二十六年ですから、いい事を書けるようになるまでまだ大分間があります。今回はアメリカでのホースシヨウの話でも書いてお茶をにごすことと致します。

私か留学中一番の楽しみはホースシヨウを觀に行きませんでした。会う人毎に馬好きを宣伝して歩いてお蔭で所騎馬友誼が次山出来てシヨウを觀に行くと、何人かの知った顔に会って一日をたのしく過すことが出来ました。春から夏にかけて週末には大たい近くでホースシヨウが取りました。金持がいゝ馬を買い牧場に預けて觀教させ、シヨウがあるとぞれに乗って出場します。従って乗手の技術は特に見るべき事はないが馬は釣合とよく又短幸に觀教されて居て中尊得程までは拒否する事は減りなく、天山の嶺点馬の中から一人の審判

が判定により優勝馬を定める有様です。

勿論ホースシヨウにも種々の形があり、日本の馬術大会と較ぶらないやり方とありますが大抵は競技会というよりは馬の品評会的色彩不強、それだけに必勝の信念というような固苦しい気持はなく、仕立おもしろい馬にまたがってオルホンの演奏される中を在ぎつ戻りつする有様は美に華やかであり馬を各三に使つてフアツシヨウシヨウといつた感を抱かせるほどでした。シヨウは午後から始り大抵は夜の十二時過ぎに終るので午後の部と夜の部に分けてあります。屋外馬場で行う場合は夕暮れ直に終り夜はダンスパーティーとなり、乗馬家たちにとっては大切な社交場といふわけですが。

私か最も興味をもちて觀ていたのは、ウエマタシイスインタでした。右手はホースをささぐのにつかうので左手だけで馬を御するわけですが、馳歩からの停止へスライスインタマツルし直ちに立上るような後肢撤回に引つゞいて馳歩突進、又、存牛を右に左に追つての馳足などなかく、夏事でしたか体重に上る扶助を更に多めに使つて居りました。

帰国直前に私もホースシヨウに出場致しました。その最初の種目はモテル・アント・タルーミンタというやっで、馬を手入れし更に姿勢、歩容等をよく審判員

下披露するという競技です。

朝から馬身にもぐり込みスラシをかけ身を掃除拭でフケをとり、左マブにはリボンを通さしこみ、蹄を磨き才金を拭いてリントウ入り後肢を覆らせ頭を高揚させ奉勢をとらせたのです。鼻の穴を掃除することをつかり忘れて居たので下位に甘んじてしまいました。この競技は同好会の乗馬大会の時にやってみようかと思えます。馬がとこきれいにありますから。

アメリカでは日本より盛んに乗馬が普及して居ます。夏休みが近づくと新聞雑誌にサマーキヤムスの広告が天山出ます。少年少女を乗め一ヶ日位乗馬や水泳を教えるのです。親たちは子供をそこに一夏預けて自分たちもんびりと休暇を兼ねるのです。私とライオンケキヤムスに行きたくて広告を探しましたが年令が足りなくて失格でした。又、大人達には「夏の休みは野性的な楽しみを」といふキヤムツチフレーズで多くの牧場が一週間。ドル位で観光客を誘います。名前は牧場でも馬が天山いますが夏の窓から金をまきおぼるのが商売ですから乗乗施設は整備しており、ハリウッド的ウエスタンを味う串の出来る貸馬付観光ホテルといった方がよいでしょう。更に大抵の観光地、遊園地には乗馬を兼しめる施設があります。そんなわけで乗馬は老若男女を問わず非常にホピュラーな楽しみです。学校で

出している突閃書に「ポートに適當な場所」のリストに貸馬屋がちやんと載っていました。

(昭和廿八年・東京部(高達)助手)

旅と馬

瀬田信哉

現代旅行文学全集を読んでいたら、会津ハカ、乗馬靴、と題して書いているのが目についた。冒頭に、大正十四年の春、奈良の池に出かけるとき、私はいつになく、乗馬をホントに地味のついた長靴を穿いて行ったとある。聖徳太子が撰取であった頃、今の法隆寺の東院にある斑鳩宮から、皇孫小墾田宮^{ちほりたのみや}まで、毎日乗馬にお出でになつたというから、自分とどの御跡を馬上で止つてみたくなつたというのであるが、あいつくそんな長靴のお氣に吾すような馬が附近にはいなかった。そこで奈良まで行って、貸馬を交渉したところだ、貸馬が高いくので、終はとらく、都屋から馬場まで位しか我々が歩く事のないように出立で、斑鳩の里を歩いたとぞうだ。実に滑稽な話だが、当時軍人依

らざんを格好としていたのだらうから、何と奇妙なとの下人目には映らないかと知れないが、放たつ癖からその様子では余りに何々しい気がする。オー・スポンに長靴な人でさんなハリッとした服装では、途中で、聖徳太子すら驚く事だらう。

二、で一寸気になつた事は、果して昔の人が馬上にある時の装束は、どんなものだらうかといふことである。愈々向かて注意すれば分るのだらうけれど、まさか草鞋履きではなかつたらう。昨年の春、出雲の松江城に行つた時、城主がつけていたといわれる拍車を曳たのを覚えていたが、大きなナツチリしどこので鑑奪たつたら、さしづめ、アイヌホツケーのゴールキーパーのようなものではなかつたらう。

よとに戻すが、彼が二うして琵琶里を旅する気持が判らぬこととない。特に、大和路とか途外は来て、今時なら鍔光ハスで塵跡の探偵を思て行くだけなら、大雪山道とか武蔵野原を走つていけば、その方が雄大でいゝわけだ、又、僕に云わせれば、馬士のひとと比べていごと大同小異の気がする。斯くなる古郡の匂いのするところでは、地面に自らの足をつけていってこそ、昔の僻がしのばれるのである。一寸田札のような舌（ヒ）いってと拜んだこととないけれど、高き所から眺めていゝ気分になるなんて悪であり、悪くはねた

石ころの一つ一つに何の出来が勇こら、道筋にころがる一石の石、一本の雑草にその粗末をたどる時、華かなる余夜朝の趣きを再現出来るのだらう。何といふことのない田舎道ではあるけれど、一歩一歩のうちに、幽きし昔の幻影が浮んで来ることだらう。いつと馬に乗って、高い所から見て下しているのが賢明だとは限らない。といつても、自分がこのような道の一石の石に注意を傾けているといふのではない。たゞそのような気持を持って、あらためて歩けることの出来る日を存しているとも言える。特に、朝をばなれて数千里かの辺境の地にあってこそ、このような気持が湧いてくるのであつて、城内に住んで一生を終るものではない、今の自分の境地にさき達し得なかつただらう。二人なところでも樋口さんと入部早々口論したことを再考したくないので、馬の背に揺られながら旅情を乗しむのも、またいゝものだといつておこらう。

朝ち、彼に、小豆島の東段段で馬に乗つたといふことをきいて、それなら今更行つた時には乗つてやらうと思つた。彼が行つたのは中学の時だつた。そこで初めて気配というのを見て、乗つてみたいと思つたけれど、急な坂道、とし落ちれば何処まで走るか分らないのでマめにした。奇妙な岩石が左右両側に連り、頂上まで登山客を厭わさないけれど、結構消耗する。だから

ら、悠然とせらるを馬上からながめて行くのと、大いに結構だと思ふ。又、要仙でも乗馬をぬけけれど、あんなに大なる牧場で遠く海までをも眺めるには好都合だとも云える。

旅行をしていれば、或いは変つた馬をみつける事が出来るかも知れぬ。和歌山の友ヶ岳には木曾馬が乗れるようにしてあつたし、東春は比叡馬や対州馬に乗る機会があるかも知れないと、又違った興味をとりて旅行の計画などたて、いる。

今、馬が重い足で通り過ぎて行つた。石炭を運ぶ馬車だろう。たゞその足音が、死んだの路だけに重々しく聞こえる。勿い時には、冬の夜など、コンクリートの道を蹄の音をひびかせて歩いて行ったのだが、今では、家についてそれと聞けなくなつた。しかし、下駄の音が高らかにひびいてくるらと想像すると、望郷の念が湧いて来る。この雪國に、馬ソリの鈴の音が聞かれるのともうすぐだろう。

(農学部(製)二年)

馬乗り隨想

渡辺正朋

忘却とは、忘れ去る事なり、大槪の辞書にはさう出ている。馬を引けば、(一)家畜の一種、馬科の哺乳動物、体大きく、四肢強健、温順、伶俐、穀料、糠、糠、草、餌、食用、(二)ふみだい、(三)まねわなひ遊火費を受取るため客に同行する者、つきま、(四)将棋の一種馬、(五)とくは、と出ている。馬面と云ふは長い顔、馬の背と云ふは乗性ののはつきりしない着を穿る者、馬乗りと云ふは馬に乗ること、又はその人、またがる事、分りきつた事である。馬の鬃とは馬の尾の毛の事ださうである。又、持頭語で、うま、と云ふは(同類中)一本の大きい事をいうのださうである。馬騒はその例である。何と辞書を紹介している訳でもなし、引き方を説明しようとしているのでない。馬という字を引いたら出ていたから卒でに書いたまでである。

温順と云つても馬の中にはやたらに敵むもの居るし幽むもの居る。一般にいつて、エネケツトを心得ていない。入部当初乗つたのが、朝霧である。彼は引馬の時、口惜しいじやありませんか、人の足を踏んで知

らん義をしていゝのです。我々だつて、泥んたハズヤ
電車の中で、他人の足を踏んだら、一礼するものです。
失敬ノレか、失礼しましたとか、尤も馬に、敬え。さ
れて喜ぶ人もあつたらうし、失敬されて喜ぶ人もあつたらうが。
当番の時、馬のくしや、みまもとに全身に浴びる事が
ある。普通なら、横を向いてするとか、ハンカチで押
さてするとかするものだらう。尤も馬がそんな事をし
たら無気味だつたらうし、そんな事を馬に要求するやつも
馬鹿であつたらう。

老日ふと、馬大家という感じを感へ出した。ある
大層馬の好きなお大家さんがあつた。彼は貸馬を持
つてましたか、誰が頼みに行つても貸してくれず、或
るこの馬好きをよく知つてゐる人が頼みに行き、話の
中に矢麩に、馬々を入れてしやべつたら、挨拶よく貸
してくれたら、……種かそんなお断だと慰めました。
大層な馬好きがあつたのです。Yさんの友人にMと
いふ人があつた。彼は群馬界のさる財産家の家
に生れましか、若い頃から馬が好きで——といつて
と愛馬の方ですか——一人上京し、自若し始めました
が、馬に憑かれ、銀炮をかつぐようになり、駒込に住
みましたが効き目がないので、駒場、高田馬場、新橋、
横浜の馬車道など、数々と所を移しましたか、ギャン
ブルの美徳のない奴には全く無効で身代をつなし、今

ではYさんの町の橋下という所に巻を巻んで静かに暮
してゐるさうで、Yさんが訪ねて行つたら、世は馬々
ならぬとのよ、といつていたさうです。昔のお話、一
はお侍さんがあつたさうです。愛馬心とはいき、大層
な力持ちがあつたものではありませんか。この間の街
乗の時、乗つていた。北澤が落鉄してしまつたので
履合まで背負つて行つてやうと思つたか、彼々。北
澤が、御無理なさいますなと澤々(淡々)としてい
つてゐるやうに思きたので(勝手な人です)、遂に
彼々の背におぶさつて解つて来ました。

群馬には怜悯としてあつたけれど、彼らは禪の心得
があるらしい。彼らにとつて一番落着く、一番心安ら
かにして居られる馬房——バンド・ルームであり、リ
ビント・ルームであり、雪隠である——に、からく
に干した寝やらを入替えてやると、すぐ、じやー。と
用を足し、履をじつと履つめて、禪こそ組のなにか、
酒りを削いでゐる。秀吉が信長がよく憶えていな
い、が、彼は養次にと、雪隠の中に杉葉を敷入れてお
いて、その上にさらさら、と用を足したさうである。彼
等馬たちとお大名並みである。とちあれ、雪隠とは、
雪降神所が常にかわやの中の掃除をしながら大悟した
といふところから来ている言葉だといふことである。

尾端なことを云うと木口が出るから止めにして……木口で悪い出したが、木口出しも乗でない。あんな簡単な事でも存外時間かかるといふのです。当番の時、朝一寸寝すごすと、寮の朝食を食いそこなってしまう。そんな時は馬が飼料を馬どうしに食うのをうらめしく思つめて、我慢するのである。考えてみると馬なんていうものは、のん気なものである。あつして一日中食つてはみらくしていいはい、のだから、実に怠慢であ

る。なんて云うと、馬に突かれるかと知れない。こんな事を云つていゝ自分と怠慢の点に於てはみけまとなない。久しく練習には御無沙汰してしまつていゝ。それが戻つて一向に上達しない。だから吃草諸氏の有難い御指導を受けてと馬耳東風である。何卒懲りずに御指導賜りたく、おねがいする女才です。

(牧場一年)

生きものの記録

飼育管理の現状

佐伯雄一

前年寒村山兜輩より飼育係をうけついでからはや半年、どう冬になりました。

全馬高令ながらオトとめけず元気で本年は正派な鞍轡を殊してくれました。

又、今年は六月に四才の鹿毛馬、林城彦が入部し、大いに期待していましたが不幸にも馬に蹴られ、相当の傷を貰い、何の調教を施すことなく冬になつてしまいました。Eが、今後大いに期待したいと思ひます。

まづ現今の飼育状況を知らせしめると自馬七頭を所有し、ニースン中は農場より朝番、午後の二頭を借出し練習馬七頭と非常に悉はれています。しかしオ一農場畜産部に全く寄注してゐる有様です。即ち全馬農場に属し、馬術部員一同がこれを飼育管理してゐます。飼料は殆んど農場から支給してゐたゞいていますが年間燕麦約二八〇袋、乾草約十二トン。これは冬期埃草に用い、年間を通し切草として用ゐる。

春頭秋の投草には昔刈野菜、スントコーンを用いる。寝わらは約十二トン、燕麦稈を用いる。どちろんオ一寝場が出来ると燕麦を寝場の馬と分けするのですから、どうして足りぬ購入しこらつていましてが、この二、三年寝場の子算が苦しく、不足が大きな問題となつています。このエメシーマン中の練習量も相当ひつきせつかく管理しながら維持飼料程度しか与えられず、これでは今後の前の発展に大きな支障を来すこととは似て似せず。これにつき、今年夏内に学校創とはつきりした種を出さうと考えていますが、皆秋の御成力を大いに頼らう次第です。

健康状態では各馬に非常な差がある。特に北斗馬は指令のため四背の姿が目立ってははしくなり、又気候のかわりめには北斗、北斗が凡邪気味となり北斗は飼料のかわりめに胃腸障害をもちます。その他秋の飼料としてスントコーンを用いると全馬に御成力と異なる。

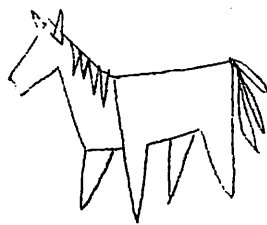
又、今年は三月初めころ北斗、北斗の四肢に奇生虫が出、大部毛が抜け、とゞれました。これは冬期道路上で踏乗するため雪外の馬より及やばにとらつたのでしよう。又凍耳の冬期、昔草の雪に降に北斗、北斗が腎臓症状が現われたので今後昔草の雪に冬期にはカルシウム剤を供給しなければなりません。

事故の方では昨年より大體少くなつています。か

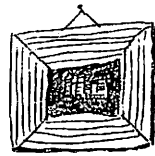
あいかわらず管理上の不注意が原因で起つています。特筆すべき大きな事故は林城が八月、馬に蹴られた二ヶ月休ませたのと、國体、全日本、に参加して帰つて来た馬のうち、北斗馬へ全馬股をはらしていったことが特にひどく腹れ、熱をもち約二十日休ませて冷湿布を貼けようやくよくなりました。今は全馬元気で冬にぞなきでいますが、越冬準備も翌期台箱で乾草を匿ひ後、寝わら、スントコーンと塵を履台の修理と終り全馬快いなを越せると思つています。

最後に、馬と共に今までの皆さの御成力に感謝して今後の御成力をねがい致します。

(飼育係・製草部(畜産)三年)



十三話



おさま
小山
教

(一)

慕馬の語……いつたつたか。北斗、トヒに乗った瞬間、反対側に落ちて、馬術部一。シヨパンの異名を持つ音楽家千葉新君に笑われましたけど、初めての慕馬は今は亡き。米故、君でした。その時、鈴を振がすような声で。この馬が一番反撥少いんだま、と云われたのが、昭和十四年生れの三年生でした。

(二)

チヲリ……入寮間もなく初めて馬術部の部屋を訪れた時のこと。内垣君の僕にはこれがアイ又人かと思つたやうな人物が、ギロリ、機手からこれは又白面の美男子がチロリと僕を睨みました。僕はもう走って帰りました。今だって時をまゐるまゐります。

(三)

若ない顔を持つ男……馬術部には笑の芝居で期待がされたのに不当に居残った人がいるというので期待していたところ、何とまあ面白い顔な人でしょう。ビールを飲み連れられていつとも思った時良くみたら、どうやら陽に焼けた様子でした。たゞそれが何なる因果か、ちよつとまだら模様になった様です。

(四)

夢で歌を歌う男……夢を見る時間というのは全く皆眩可能な程敵かを瞬間だと察表した字音がおりますが歌を歌うということはどの様な説明が加えられぬのでしょうか。研究の余地がありそうです。現に歌う人が馬術部にも存在しているのですから。

(五)

喫茶店の名ばかり覚えていた男……森という奴は実にどうあきれられる程記憶力の良い男です。何しろ新宿、渋谷、新橋、日本橋、浅草、池袋、と盛り場のごこの小路には何という喫茶店があつて、そこでどうしてのあつたのと、饒に四時間以上聞かされたのですから考えて見れば面白い話です。

(六)

アンソニー・クインに多で射られたこと……僕は乾
草のつんである野を果命に逃げました。足が思うより
に動きません。爽快な笑いを浮べたクインが盛んに弓
を射つて来ます。やっと虎口を脱した時、汗をびっし
りかいた僕は危くベッドから落ちるところでした。
ところが馬術部に貴重な存在である。カマ。は至って
感受性の強い男ですから、早速次の夜、今夜は、棍棒
でぶん殴られたさうです。オヤカマ芝に、前主将が余
程怒るしかつたに違いありません。

(七)

優しい理主将……アンソニー・クインに非ず、これは
はこれは象の如き目を持つお方です。いつも機不足な
んだと怒りますけど。とにかく決められたことは。や
ればいっんでしよう、やれば。

(八)

セッケンを座下につけ左前……馬丁をヤったときのこと
と、フィールド・セッケンを座につけて和久門泰元を
慌てさせ、赤っ恥をかいたことがあります。どうもお
かしいなとは思ったんですけど、何分にも愛をんか

漸く傍にも行つたことか否いそんでしてつい……
むとこれ又貴重な存在のK君(伯人の名譽を重んじ特
に名を敬す)は鞍を座につけたさうですけど。

(九)

女性重優勝……関東北大合、本当におめでとらござ
います。しかしあの写真は出来ませんでした。美解しない
で下さい。僕は写真が出来であると云つたのですか
ら。

(十)

曰高の草彥馬……田舎の草彥馬、ドウター、ドウタ
……これは余談になりますけど、下飯坂さん曰く
……女性さき登つた、身暗し台はその後、つぶされまぞ
うです。但し、台尻で。

(十一)

豚を可愛かりましたよう……孝祖さんが云いました。
豚はふもじくであの豚にスーニー並くのぞと。

(十二)

朝霧はかわいいぞうだ……都屋へ行き精リちよ
つと驚き見て下さい。馬房に居る時は必ず首を出して

我々を物欲しけを類でみてゐるものがおります。さうです。あの元氣な。朝霧。です。障得だつて良く履ぶのにも、あんな泥沼にけれられてその上綱さき満足にとらつていないとは……とう／＼語るが、聞くが其の物語です。たから時々、それは無言のレミスダンスを試みるのです。

(七)

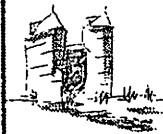
ダンスの事……どうも時勢に雇はれ林な気がします。皆さん大変お上手で。僕だつて。阿波踊り。や。フラダンス。なら名取殿ですよ。でも僕はどうせ踊るなら誰と居ない青空の下、野花の中で美智子さんへ正田美智子さんのことでは毛頭ありません」と一階に心ゆくまで、典雅な宮廷舞踊でとした方がよつほど楽しいんです。とてない男の愚痴でないことは皆さんすぐおわかりのことと慰みます。本当です。

(八)

・コレッ、オヤマ、貴林は適当に他人をけなしたりしてはかしくないのか。僕の良心が声を大にして叫んでいます。すると、でござんなこと心配な事はないよ、皆舞しいんばかりだから。とどう一つの声かこれは、の鳴く林な声でさつとさ、やさました。

(教養一年)

入部当時



森
弘肆

今春非常な期待を持って、初めて札幌を離れた。笑はこの学生時代に何か一つ特定のクラスに入り特技を持つとらには思つて居たが、これと云つて確信したものはなかつた。

と二三が入堂式当日、教養部のロームのと二三を、乗馬部と勇しく？五、六人の馬術部員が手綱さばきと舞やかヒやつて来た。その騎乗者たちの晴々と乗しどらな姿を見て、僕の心は決つた。そこで早速乗馬講習会に参加すべく申し込んだ。

講習会に出るのは楽しかつた。早起きしなければならぬの次ちと辛かつた。それでこの期間、二、三日寝坊して休んだがとかく終つた。

講習会では先輩が指導してくれたが、その中で今でと脳裡にあり／＼と思ひ浮はれるのは門家さんの姿である。何と云つてもあの角鴨や、マカカリ方は印象的であつた。あの朝とやの中で馬に乗って居るのを見て

僕らの野では味をなかつて生き／＼として新舞臺に昇
した株を気がする。今、思ひかきしてみると、現在で
も自分にとりであるが、僕は馬に乗った人ではなくて
乗せられて馬と云つた方が適當であるようだ。僕ら
が種々の扶助を蒙せられてそれをするんだが、それよ
り先に馬の方が前の馬についてやっているんだから、
全く馬に乗せられた人形であつた。

講習會に参加したのを機会に馬術部に入部した。し
かし僕は戦前まだ家に馬が居た頃、馬車馬と乗馬の二
頭であつたが、よく乗せまゝとらつた事は記憶にあるが
馬についての知識は皆無と云つてよかつた。先輩から
手入れの仕方や鞍の附け方を教わり、馬に慣れて来る
につれ乗しとは倍加された。特に馬を意のままに動か
すと云う事については非常に快感をおぼえた。ところが
次或る日北風に草を与えてゐる時突然水がつかれて以
来、いさゝか自信をなくした。今でも楡と僕は恐くて
近みき推い馬である。

(牧養一年)

合宿の思い出

千葉祐記



およそ合宿などと言つて怪し気な合宿には出陣した歴
史のない小生は、はじめは興味半分に参加したのです
が、やはり結果的に見てどうも怪し気な集會でした。
先ず最初には驚かされたのは、宿舎の正統な草でした。
全くね／＼と後輩もきつと同様の意を表すでしよう。
それには漸く運動ででもあるのか、ふとんを置成される
ことでした。どうもこんな正統な宿舎にふとんがない
とは全く不思議でしやうがありません。でしやう、皆
さん……ネエ……

次はこの宿舎には正統なカ、とノミを飼っていること
です。そのカ、やノミの又偉大なこと、全く見る人の目
をみはらすないでおかさないでしやう。それにたまし
て彼等草の採種のすごいこと手荒いの手荒くないのと
その採種は全く正確に絶するほどです。彼等らの爪あ
とは二三日後までと生々しく残っています。全く目と
あつたれないありさま……。次に夜のうた、ねは滅

物なる二とを深くキモに絶じ左とす。

前期の合音の際は小生の右隣リにHさん、左隣リにFさんが寝ていました。草木とぬむる丑前時、ヤトわに両才から太い丸太が飛び出し小生のカヨワキ身体をばかいいじめにせんします。あわやその絶命の寸前に、ミス・カガーン、チケリとこの丸太を……

まあ他人のことはさておき自分の寝ている時はさうとつともらしく……時々石ツステカ腹や腰に氷カン……

これとお互い林で……

次に合音で動くなるのは野壱だけかと思いきや、な人とおにはからんや、麻雀の動くなること、野壱の動くより数倍と……

名人の上り手、
リイチだせ、早急なオ、それだ、ロン、
オイ、二、四だ、へへ……

(数巻一年)

日高にて



好博 鶴見

庵を開けると、朝の冷気が肌をさした。柵にかまされた青い草の露、さらにその先には、白薔をまじえた雑木林が続き、さらに目を上げると、すでに紅葉も過ぎ、冬枯れぞめた山々が残っていた。都会の騒音に馴れた私の方では、この静けさになんとも云えない安心感を帯びた。柵の中には、数頭の馬が一匹をなして草を食べながら寝動していた。その姿めらかな動きは、自然の調和を乱すものではなく、かえってこの自然を強調するかのようだとさえ思った。

。ヒューッと口笛を吹いた。今まで一心に草を食べていた馬が皆、出来るだけ首をのけし、耳をたて、目を大きく見ひろいで、いつせいにこちらをみた。一頭の馬が、こちらへ向って来た。すると、他の馬はそれぞれに動き始めた。何がばかしいのか、彼女らは、まっすぐに我々に向おうとはしない。シタカタに、それなると時々こちらをうかがいなから、道草をくいなから、さうくどやうて来た。何てつ、ましい態度だろう。

何と美しい目をしているのだらう。私は次のような小説の一部を思い出した。

「なんでもみんなよい。なんでもみんな美しい。な
也たらう。なせなら、全てが真だからだ。まあ馬を
みてごらん、あれほど大きな鞍が、人間の傍近く立
つておるではないか。また牛を、いつも物思
わしきうに首を垂れながら人間に乳を与えたり、人
間の為に働いたりする。まあ牛や馬の顔を見るがよ
い。なんというつ、美しい表情だらう。たがたが自
分を無慈悲に鞭打つ人間に對して、なんという愛慕
の情を示しておることだらう。なんという悲ぶれな
い、一途に人を養ふような表情だらう。また何と美
しい顔だらう。こらいう鞍には、いさゝかお罪はな
い。たゞこら考へるだけでも笑が溢れるではないか
……」

私は身をもつて、以上のやうなことを感じとるこ
が出来たのである。日高への初めての遠足で、私は、
充分な收穫を、即ち、自然の深い愛を再確認したので
ある。

(牧養一年)

街乗



玄 岡
暢 夫

十一月十二日より部員が順次街乗に行く事になり、
蹄鉄壁に行く事で学校の外に出る面白さの味をしめて
いた僕は、大いに楽しんでおりました。うまい具合に
二回行く幸運にめぐまれ、大いに街乗の味を堪能しま
しました。

二回共田山を目指して行きました。一回目は、行く
程に途中で道がなくなったり、工事中の芝生の土を走
つて人夫に怒罵されたりしたが、無事四時頃帰って来
ました。二回目は行く予定の人がやめたので、馬が余
つた為、幸運々に乗って行きました。幸運は前
回の、北翠に比べて着着きがよく、速歩の号令が
かかると蹴歩をしてしまい、前を行く。朝霧の尻に
くつつく。翌ると、朝霧は目を伏せて目をかいてい
る。危いなと思つて、朝霧の横に出ると、前は、北
嶽で、これまた零注意。余りに手綱を引っ張りすぎ
て、行く途中で指がしびれて来た。北嶽は朝子が
早く途中で引返したが、この時と帰りがたつて足が

をして小きおみ後下さかたて行く。馬をイラクする
ると、足おみをするのかと初めて知ったが、全くど
余した。こらして手をしびらしている内に田山下着さ
休憩した。

女ンスの講習に行っている連中は、芝生の上で早速
。幸運の足踏みに似た事をやり出した。この時、木
立の間を一人の女性が物思いにふけていた様子でや
って来た。木塚君が女ンスを中止して、親切にパー
ティー券を控りつけに行つて断わられるという一幕も
あつて、いよく三角山めがけて出発した。山の下か
ら直線的に道のよい所を登り出した。バリーくと倒れ
た木を踏み折リ、少々西部劇の気分を味わいながら登
つて行くと、山の中腹あたりで直感に出た。そこから
更に馬で行くか歩いて行くかで最良がわかれたが、能
局こゝで休憩して引返す事にした。はるか札幌を眺め
たが、煤煙が黒くおっいかぶさつて、足許には赤や緑
の小さな家がぎつしり並んで居て、風が吹いたらっ
されらな家ばかりに曇きた。帰りもすぐ徒歩をす
るので通つたが、大体木立の所まで徒歩で行つたので助
かつた。動物園の前にもどり、前回車をひやした木立
の中へ入つて行つた。前傾して木立の中に走り下り、
そのまゝの姿勢で首だけを上げて前方を覗いた。「どうら
来た」と首をすくめていると、木と木の間に走つて行

く。街乗の中ではこゝが一番面白かつた。全て馬まか
せで走つて居ると、わざと狭い所を匯つて行くよう
で、スリルがあり、道路に出た時は、安心したよう
な残念なような気がした。道路に出る止めようとしたが
止まらぬ。幸運の用心矢の如く、さっくりかき
つて引っぱつたが止まらぬ。アヌアルトの上をバ
カバカ走つて居ると、丁度傍を匯つていた馬車の前
で、此聲がひっくりかきり、木塚君が放り出されてい
た。危いなと思つて居ると、幸運もゆるやかに機
すべりして行つて、いつのまにかこゝちまで放り出さ
れて、ひっくり返つて居た。台階に出なかつた急轉組
二人が足事に放り出されて、こゝいう所に墜つた
のかと思つていたら、靴着くと足を踏らし、乗つて
いた小山君も履が降りたという。ひっくりかきりし
なかつたが大司小翼、まず安心した。降りた。幸
運は疲れたか走り出さず、無事白がとっふりと暮れ
た頃降り着きました。街乗に行つた場合、或る一つの
事が危険になつて居るようですが、二回目も残念な
ら何もありませんでした。来年チームに交られる方は
お忘れなきようおねがい致します。

(教養一年)

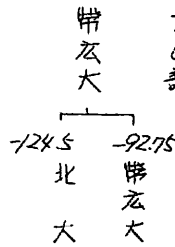
昭和三十三年戦績

田中 紀介

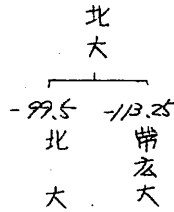
五月二十五日

対帯広畜産大学春季定期戦（於帯広）

シニアの部



シニアの部



出場選手

生田、千葉、村山、森本、佐伯、本橋、田中

本年度と対外試合は先ず帯広に遠征、シニア一戦で敗戦したがシニア一戦で辛うじて面目を保った事が出来た。例年の争であるが、軍中一泊して帯広に到着早々試合で一帯休息のとれない遠征である。

六月二十六、二十七日

対七回東北北海道地区馬術大会（於岩手）

東北大

岩手医大

福島大

帯広大

北大

岩手大

敗者復活戦 帯広大復活
優勝 北大 三勝〇敗、二位 福島大 二勝一敗

	北大	福島大	帯広大	東北大	勝点
北大	/	○	○	○	3
福島大	x	/	○	○	2
帯広大	x	x	/	○	1
東北大	x	x	x	/	0
勝点	0	1	2	3	

出場選手

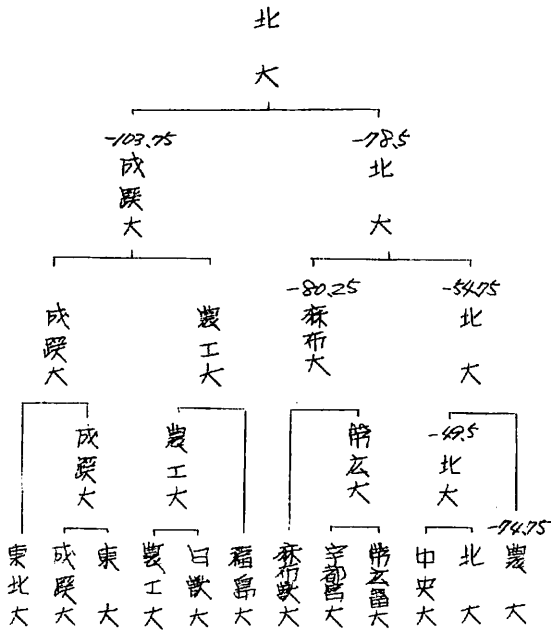
鍛田、樋口、千葉、生田、村山、森本

試合方法はオ一オ一送で三校を送出し、敗者復活戦で復活した一校を加えて四校リーグ戦であった。これぞ我部は昨年に続き二連勝した。又二の大会より十二月に催される予定の全日本学生王座決

定戦に東北北海道地区からの出場枚を併せ獲得した。
 「王次へ」「王次へ」は珠々の合言葉であった。今まで鶴鹿の争闘により東北北海道地区からは参加出来なかった。が泉令に運動をした結果今年から参加出来る事になったのである。「王次」こそは我々の永年の恨みであった。これに優勝すれば名実共に日本一であるからだ。

六月二十八・二十九日

才五回招待東日本学生馬術争闘戦（於農工大）

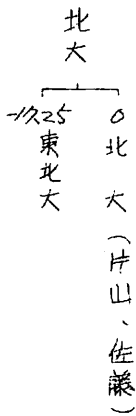
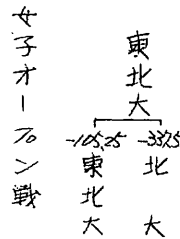


出場選手 生田、千葉、村山、鎌田、樋口、森本

選手は忙しかつた。岩手から直ちに夜行列車で東京に着いたのであるが幸い一日目には試合がなく一日観戦後二日目を迎えた。成蹊大と北大はリードされ新聞予想でもこの二校が覇を争うものとされた。東北北海道大会での余勢をかって一戦二戦と勝ち進み、さすがに決勝戦は苦しかつたが勝利は再び我部のどのと交った。最優秀選手に生田、最闘選手に千葉が並び、東京勢に北大の力を確認させた。

八月十三日

才三回対東北大学定期戦（於仙台）



九名戦で、内、女子一名を捉えなかく、派手を千一△であつたが無念三名の大運失点を出して惨敗した。しかし二人な馬も居るのかという事で良い勉強に亘つた。一方女子はストリート勝で男子は頭が上りな

つた。

八月十五、十六日
 第十六回国立七大学定期戦（旧七帝戦、於東京）

	北大	東北大	東大	名大	京大	勝点
北大	—	○	○	○	○	4
東北大	x	—	○	x	○	2
東大	x	x	—	○	○	2
名大	x	○	x	—	○	2
京大	x	x	x	x	—	0
勝点	0	2	2	2	4	

八月三十、三十一日
 第一回招待全日本女子学生馬術大会（於北大）
 優勝 北大 四勝〇敗

優勝 北大
 出場選手 生田、千葉、村山、森本、佐伯、田中
 これで四年連続優勝、銀の大杯は私には入学以来初めて我部にあるのでマレンジという感じがしない。尚東北大と対戦し勝ったので優勝としたわけである。

二位 学習院大 三勝二敗
 伯人戦

二位 北大 中村美幸
 五位 北大 佐藤興子

団体戦は一チーム三名とし、学習院大二チーム、慶応二チーム、北大一チームで五チームリターン戦を行った。参加チームが少くないのは残念であった。自馬の所帯とあろろがよく戦い、東京の強豪を下して優勝した。本大会により女子学生馬術界がこれから益々發展する事を期待して止まない。

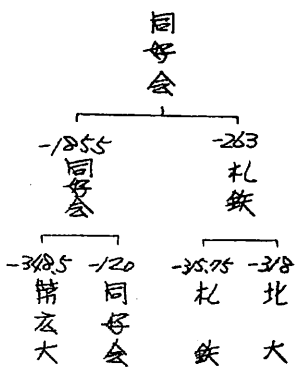
九月七日
 全道学生馬術選手権大会（於静之）

常呂大
 二位 北大 佐伯雅二
 三位 北大 森本勝次

無念敗れた。今回は特に走車が火いした。道内での試合には敗れることが多い。実力はあるのだがと思っ

九月廿一日

沖田回北海通馬術団体選手権大会（於北大）

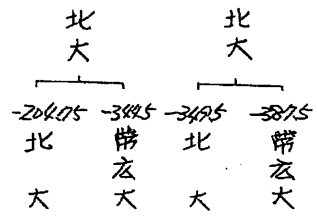


少し遅リドホームランドでの試合、だが強い北大
と二の日は現けた。とにかく同好会は鬼門だ。一変位
優勝をとりたい。

九月二十三日

対精玄畜大秋季定期戦（於北大）

シユニアの部



ようやくシユニア、シニアと北大のどのにすま
とが出来た。だが自馬でこのスコアは何だるまどか
と芝牽トオコレタ。全くであった。しかし三年目以
下の新メンバー、今後の成長を御期待願います。

十月十九、二十、二十一日

第十三回国民体育大会（於、富山大山町）

総合馬術

優勝 比掬号 千葉隆夫

四位 洋孝号 鎌田正人

団体馬場

三位 洋孝号 鎌田正人

大障害格闘

四位 北岑号 生田勝一

大障害格闘

四位 北隈号 生田勝一

前年静岡の国体には馬術部門がなかったが、本年は
富山県大山町で盛大に行われた。当部では自馬四頭
を輸送し華やかな戦績であった。（洋孝号は札幌乗馬ク
ラブ所属で北斗号は全日本、学生自馬に出席し国体は
は出場しなかった）

総合での優勝馬比掬号、大障害の北隈号、更に調教
訓練の賜物である。北隈号は優勝こそしなかったが実

ト更なる飛越不りで一障桿拒止のため残念なら四位で
缺に惜しかった。

十月二十五、二十六日

才一回全日本馬術大会（於名古屋）

総合馬術

優勝 洋孝号 鎌田正人

九位 北楡号 千葉幹夫

乙馬場

四位 洋孝号 鎌田正人

中障桿飛越B

十一位 北楡号 千葉幹夫

北峯号 田中紀介

六段標越ぎ技

北隈号 佐伯雄二

本大会で優勝者を出すと思つたが、よるこびを味わって
中障桿は見なれないう障害が多く、コンチ不十分で失敗
した。北峯号は調教不十分でまじく能力のある馬だ
けに惜しまれた。

十月二十八、二十九日

才一回全日本学生自馬隊手板大会（於名古屋）

一位 京大 二位 関西学院大

三位 慶応義塾大 四位 北大
和久成徳

総合二位 千葉幹夫

総合三位 千葉幹夫

出場選手 北三号 鎌田正人

北隈号 生田勝一

北楡号 千葉幹夫

北峯号 森本峰友

全日本学生馬術連盟が結成され才一回の学生自馬大
会であった。競技種目は総合馬術の多で団体は三名一
チームであった。結果として総合馬術の多で団体は三名一
（ツイていなかた）我が部の愛馬は他に比べて可成
り高いレベルにあり許されるならば来年は自馬会都出
場させたい。

十月二十五、二十六日

才一回関東北女子学生馬術大会（於福島）

優勝 北大A（中村、片山）

二位 北大B（佐藤、高階）

和久戦

四位 佐藤実子

団体、全日本の遠征チームが参加すれば一女子と
並んで優勝した。この大会には東京勢として青山学

鹿が参加、地元から福島・群馬、東北大等が参加した。今夏の全日本女子鞍と併せ考えると理論上日本一である。

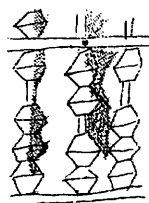
今年と芝草方々の御支援のお蔭でこのように立派な成績を収めることが出来ましたが、その理由として練習方針に於て責任自馬制をとった事、若いコーチヤーに恵まれたこと、新馬調教の機会をとてこと、若いチームワークがとれたこと等があげられると思えます。責任自馬制度は今年試みとしとられたので全副頭を各馬に配分してその馬の調教管理一切の責任をとらしたものであるが、若干の問題があったとしても大いに成功したと云う事が出来る。このシステムで予算が許すならば来年度は是非とも学生自馬大会には全副頭の馬が出場したいのである。

コーチヤーとしては学内の芝草又兼田を中心とする上級生全員が懇切丁寧且つ厳しい指導にあたった。又杞鞭乗馬クラス所有の四頭の新馬、我部の一頭、又尾花馬等、新馬調教の練習には大いに恵まれ、これらから学生は事は少くないと思ふ。チームワークについては申し分なかった。

今年も中央への遠征は優勝したが併及遠征には弱かった。これは交通事情によることが多くなつて来た。

初の試合である事、又春秋と初出場のメンバーが若い事などがあげられる。しかし、毎年大体同じ馬を使用するわけであるから矢張り力不足か。又、我部では力量の階層差が大きいという感じがする。受けた試合の多くは多数名戦であることとそれが一原因ではなからうか。力量は勿論練習の結果得られるのだが、鹿鞍によるものと見逃せないと思ふ。部員が高しく経験をとり事が勝敗を別とした場合にと大切だと思ふ。総りに北大乗馬同好会には勝てないというジンクスも今秋夜つて事をお伝えし王座決定戦には必勝を約して筆をおきます。

(農学部(林産)三年)



会計報告

高橋陽

三十二年委員会頭は森本、吉田、大場の三君に依つて順次その任務が行われ、三十三年九月の役員改選によつて私がその任務を引継ぎました。現在馬術部は約四十名の男女学生によつて運営されておられ、年と共に

充実した馬術部になりつゝ、あります。それについては多くの部員が述べていることで明らかになると思いますが。

さて、ここでは財政面から私たちの部を眺めることにします。会計報告は全て表によって説明します。

一般会計収入の部はオ四表にあるように一人当の部費(月額二〇〇円)、体育会費(年間二五〇円)、入部金(入部の際三〇〇円徴収)及び体育会から予算として支給されるものによって成立っています。又、支出の方は人及び馬を含めた部の活動、運営、皆着一切を含んでいます。徴収費は部の原則として一般会計から除き、オ一、オ二表に示されている通り特別会計の内へ扱っています。オ一表でもわかる通り一般会計の収支は毎年常に赤字ですが、これは全て特別会計によって補充されます。

オ一表——三十二年要決算報告

飼食が今年妻は大きな額に上っています。これは馬糧である燕麦を五〇俵余り購入した為です。馬糧は全て農場から現物で支給されるのですが平年作の昨年度翌年の収穫期迄は保持出来ない状態です。それでやむなく購入するのでこの状態は当分続きそうです。飼糧の面は乗鞍を許せません。

その他についてはオ四表を参照して下さい。特別会

計の収入は非常に大きなものでした。三十二年十二月に映画の口ケがありそれと前後して映画関係の収入がかなりありました。

その他も幾分ありました。これらは全く不定期収入である確率は低いです。これによって部の財源の過半数を占めているのだから部の財政面は非常に不安定なことが一目でわかると思います。一方支出の方はオ一、オ二表にあるように尋常の金額が必出で行くのです。現在はこれをタンスパーティー、部員の労働奉仕及び寄附によってギリギリの線までまかなわれています。

オ二表——三十三年要予算案

特別会計支出の部にある遠征費は道内、東京方面に於て年間十回前後の割合があり、送手届は一行八名で計算してあります。その内容は東京を中心として三等在来汽車賃、宿泊費及び車路費二〇〇〇円のみで食費その他は一切含まれていません。送手諸君が乗る気持で充分賅って来てもらうにはあまりにも少ない予算です。然し現状ではこれ以上とらにとなりません。それ故の巨額氏及び有志の方々の寄附が大きな役割を果しているのです。

オ二表の差額十二万円は一般会計以外から求めねばなりません。

三十三年要特別会計の収入には十二月、翌二月の如

昭和32年度会計報告 (オ-表-1)

(自32年9月至33年8月)

(単位:円)

収入総額	402,622	支出総額	322,336
------	---------	------	---------

差引残高 80,286

[内 訳]

収 入	支 出
一般会計	一般会計
特別会計	特別会計
前年度繰越計	
402,622	322,336

[一般会計内訳]

収 入	支 出
部 費	商 品
入 金	備 用
体 育 費	金 庫
その他	預 金
計	計
152,966	191,108

差 引 残 高 -38,142

ンヌパーテイ及び四月の学内講習会に望みを入れては
います。正産本数値は全然打ちあいません。

その他にも偶然の報酬を期待してはいるのですが全く
三千かあきません。よほどの幸運がよい限り四百人の
大家族を有する馬術部はピンチに陥ること目下見えて
明らかです。

オ三表 — 三十三年度中間報告

三十三年度上半期はどしゃぶりの雨に悩まされ、十二月の王女、部報出版で部の会計は完全に蓋をつきました。

一般会計は正産の収入の他に部費の労働奉仕等でまかなえますが特別会計はどしは行きません。現状では財政難は未永く続くものと見られます。これに計する切掛けを会計員として一言のべておきます。

これは次の通りです。即ち特別会計二十余万の支出は後援会を作ることで下よって、一口一〇〇〇円の会費を出資してくれる会費が二五〇人いると馬術部もスムーズに運営出来るに云うことです。これはあくまで個人の見解ですが後援会の発足を切望

[特別会計内訳] (オ一表-2)

収 入		支 出	
映画口ケ	129,560	講 習 生 旅 遣	13,500
謝 礼 費 金	23,000	全 日 本	14,000
映画会純益	16,270	関 東 北 女 子	4,000
映画宣伝パレード	14,000	特 畜 費 (秋)	12,000
同好会より	11,000	日 高 合 箱	15,425
メ-天-パレード	4,000	特 畜 費 (春)	8,580
ダンスパレード純益	1,870	東 北 ・ 北 海 道	} 33,299
その他	5,838	東 日 本	
		対 東 北 大 定 期 戦	} 18,760
		国 立 七 大 学	
		その他	11,664
計	220,938	計	131,228

残 高 89,610

昭和33年度予算概略 (オ二表)

[一般会計]

収 入		支 出	
町 費	96,000	飼 育	10,000
体育会費	10,000	飼 育 岳 倉	30,000
体育会補助	10,000	務 務 匯 債 協 助	15,000
入 部 金	3,000	親 睦 合 加 盟 費	30,000
		試 合 費	12,000
		予 備 費	25,000
計	119,000	計	122,000

[特別会計]

		支 出	
		講 習 生 旅 遣	18,000
		遠 征 費	137,500
		予 備 費	50,000
		計	205,500

前年度繰越金 80,000

収 入		支 出	
總 計	128,500	總 計	327,500

差 額 128,500

昭和33年度中間報告 (才三表)

(昭和33年11月末日現在)

前年度繰越 80,296

	収入	支出
9月	26,646	32,928
10月	7,500	29,560
11月	18,600	30,650
計	52,746	93,138

差引残高 39,904

(才四表)

一般会計収入の内訳	
部費、体育会費、体育会補助、入部金	
一般会計支出の内訳	
飼育	食塩、腎粉、馬房修繕費
備品	光熱費(照明、マトース用品)、(合音用)食器補充 掃除用具、修理用品(針等)、靴運、その他管理上関 する一切のもの
業務通信	連絡費(郵便、電報、電話、交通費等)、指示用品(紙、筆、墨、インク等)、印刷費(部報、各種印刷物)
親睦慰労	各種コンパ、レセプションの補助、合宿補助、部内競 技会開催費(賞品等)、部員旅費、作業の茶菓
試合加盟費	各種試合参加、馬の登録料
予備費	治療代(人馬)、写舞、謝礼、大会試合等の準備金、 卒業記念メダル

する者の一人です。

(会計係・医進二年)

困ったシヤツゲリ

文 雲

元来との玄書くなんてことは下手で、特に人が名文をどのにしたのをみると劣等感におそわれたとのだが別に人の悪口を書くのではないのだから、只、自分のことを一寸書いてみようと思つてただけで困る人は芝んで下さい。

小生何時からかはっきり認識して居ないが、多分大学に入ってから否高橋生時代だつたかと知れない、何か刺戟性のあるものを食うと必ずしゃっくりが出る。へしゃっくりの標準語は知らないので、或はこれが標準語かと知れませんが、とにかく困つたもので、例えは身重かき剣を云うと、タバコを吸うとき、普通の巻タバコならなんでもないが、パイプを吸うていてニコチンが一たび口に入るやどういけません、効果てきめんにあらわれる。その教を上げればざりがよいが、カレライヌをたべた後で熱いお茶をのんだとき、ソバヒ膏からしをにかけて食うとき、熱いコーヒーを飲んだとき、その他色々である。これが出るとすぐさま台

所へいんで行って水をコップに、ちいときで一杯、暑い時は三杯立てつつけて飲んで道直らないときがある。こういうときはどうしゆらくその苦しみをおわねばならぬ、出てから木をのむまでの時間は短いほど有効で三十秒以上せつとどうだめである。

これが家の中や水がすぐのめる所なら問題はいいが、電車の中や街を歩いているときは全く悲劇である。この間も存留所で電車を待っているときにこれが起き、丁度電車が来てしまつたので仕方なく乗つたはい、が満員電車で「ヒヤックヒヤック」やると、まわりの若い女の子が「クス」笑う。余りい、気持ではなかつた。そんな時止めようとあせると絶対といって、ほじ止らない。かと思つてカレライヌとソバヒ膏と食べたり飲んだりしていいのだからこれも困つたのだ。この原因は何かと云うと勿論刺戟物を飲食することであるが、又、生理的女原因であるが、一面精神的なものも含まれているように思ふ。何故ならしばらく乗因となるようなものを食道下腹さないと起らない。そんな時、しゃっくりのことはどおちれてゐる。又こんな時、刺戟物をとつてと起らない。しかし何かの拍子に起るときがある。さうすると又思い出して今度は食べる度に起る。

こんな親子でこの原因はしゃっくり恐症にかかり、

出来るだけ書からし、コシヨウ、ワサビの類は遠慮して
いるが、折角のものも棄しく喰べだりの人だりする
ことも出来なくなる。全く困ったので、とほまか、
よい葉はないものでしょうか。

(豊学部三年)

自己雑感

森田泰生

○……老す最も重要なのは、「困った、困った」
から始まる。

数日前、リーベをカンスト読った。

俺のオ一通目の手紙——とらじんなひどいことを
書いたか忘れてしまった——トしか「それとらしい」
ことをか、なかつたのに、(華夷それ以後の手紙は
単なる用件と近況報告にすぎない)オ三通目にして
とう相手は快諾の返事と共に熱いものを添えて来た。
俺のこの気持(笑わなれで頂たいえ)。親しい愛友
に彼女の手紙の全綴を呈せて彼の経験を買聴した。
「人回とはい、加減なものさ」

「女と男と相手を探めおは決していられるもんい
やないト云う点じマオナジサ」

「俺は帰つてるんだ。俺の経験からするとこれは一
年で熱がさめるヨ。一時は死ぬ株を状態になるんだ」

「しかし、熱は冷めることは分つていてと、いろい
ろ勉強になるネー」

「それトニツク・ラヌは難で経験するものさ、俺
の場合お前より少し早かつたかし」

と二三で、よく考えるに彼女の手紙には、そんな
はみなことは一語も書いてなにかありやしない。世
学書至全何巻かのうち、三巻迄は現在非常に苦しみな
から読んだ、と云うほど、彼女は俺が手をつけ始め
「実存主義」なんか云々さ。

又、彼女は実存的にも修正存在だ。

オ一俺が頼んだ家教の口を俺がノックと盛んでい
る、同じとらにかして探さうと困苦入告していらしい。
それから、馬術部のパーティの券を十枚と快く引受け
てくれたことは注目価値する。まだある。

と二三で、俺にとってはこの通り都合がいいんだが、
彼女が大事な試験の最中であるのにもかかわらず「無
題への勧誘」を快諾するほど、俺はとうまんぼろ。
(ニヤ／＼しないで) 俺は彼女を好きだよ、勿論。
と二三が以上のことから判るように、彼女も俺を好き

マカキ

なんぞよ・俺はこのことが不思議でたまらない。分らない。俺も彼女も初め、どういうつもりではなかったのだから。

よーく、よーく考きな結果、これが「困ったし」ことの要因の一部らしい。

(ヘルマン・ヘッセの「ネミアン」読んでごらんをさい。諸兄よ)

オンマキながら「リーベル」の差。

絶世の美人である。諸兄がごらん遊ばすと、目かくらむ。くらまなしいのは俺だけだ。

○……「死ぬのたこわいから生きていましてはなくて、「生きているのが面白いから生きていまして考きる。ここぞ云う「面白い」は interesting の意であって、決して「面白おかしい」「こっけいせい」などと云う意味ではない。まあ一先僕はこゝ考きている。

とこゝで、

「何のせいに君は馬術部を脱けて行くんだ？」

「どうやら面白いかうさし」

「君はタンスがひどく好きだどうじやないか。タンスと馬術かりに擬って、学生の身分である逸益の方は一本どうなんだ？」

「どう云われると、つらいな。実はその腫りさ。だ

けどこの要はうまく僕とそれと気がついてね、一寸考きなさんだし」

「どういつを固かして貰おうじやないか？」

「うん、試合には絶対出ないことにした」

「部に入ってさんを勝手なことは出来まいぞうし

「いや、大丈夫なんぞ。ちやんとそれは、入部する時、部の方針として試合に出たい人と、どうでなくた馬に乗りたい人と入部を認められている。と云って左からなし」

「とこゝかぞいだけじやないよ。まだタンスがある也。これはどうなんだいし」

「それは今かんべんしてくれよ。初めに書いた通り事情だからさし」

「俺は思うのになね、この才が馬よりと勉強の差支えは、はなはだしい也し」

「そう一概に云われると困るんだが、僕の知っているヤツで数年前からやっている人だけ、どいつは成績優秀だよ。まあ、こんな事もあるからさ、僕だって努力するしさ、どうやら心に死なないでくれよし」

○……日記から。これは昨年(高三時代)の七月七日の夢。では、

午後三時に昼寝をしたら、目を覚ますとき、趣しい

夢を見て寝今声を出したと想う。夢の夢は初めのオは全然忘れてしまった。後のオも恐しいところだけしか覚えていない。

俺はベルシヤかどこかの仕事をしている。俺は上から下りてくる。その下りて来る場所は山の林でもありラセン形のハシゴの林でもあり、又小道の林でもあった。俺はどこから下りるのか知らないが、下りているところから覚えていて。おり左下のオは下り坂の小道であった。そしてその道へ巾が納り、三メートルのまん中に井戸があり、その廻りで俺の知人の産い人へ外国人しが二、三人、手にツルハシかスコップかを持って仕事をしていた。俺は日本語で彼らにキカイを知らせるのを心配して、「俺はこ、初めに来た。産い主は俺の知人だ」と云ったか、又だ、どうも考えていた。けか、どちらか分らない。俺は彼らの横を通ってどこに行くかと知らないで歩いて行く。

その時俺は夢の中でオ三者の立場に立つ。即ち、「空が荒れてきて、今にも恐ろしいことが起るとして、前に井戸のところに橋を架けたり人が考えるのがわかる。そして俺はそこを歩いた林に思われる。彼らが俺を呼んだ。その声水た重にもなってひびいて聞きた。俺はオ三者の立場にいなから恐ろしくなった。空はその辺のサバツの色々、木の生きていない山の色のようにな

赤茶けていた。そして唸っていた。俺は次の林を場面を自分で見た、自分で自分の姿を覗きた。(注：日記には二、三の絵が描いてあるが、その説明を簡単にすると、一面砂漠だが自分のいる小道のあたりだけ違う。画面左上方は木の生きていない険しい山、その山のふもとには、彼ら二人が俺を呼びながら走って来る。二、これは非難に遠いので点に見える)画面右上方は赤茶けた空が唸っている。自分は云々思惑しさにふるふるしながら、立っているのかひさまかいているのか知らない。(注以上)

そして彼らが「お、い」と云った時、自分の目に見えていたおれの姿の輪郭が彼らの声と同じように三重になり三重になり、がたくふるふるしているようだった。そして俺も叫んだ。「お、い」。その声は何かにおさかっているようにそのまは出なかつたが、ふりしほって出した。

俺が叫んだ時どのすぐおそろしくなった。二重目に叫んだ。この時は俺はベッドの中にいるのがわかるようだったけれど非難にちぎるしい。そして俺がコチコチに固くなって動かなく、何か知らない力でおさえられていくように。そして目が覚めた。恐ろしさは全く無かつた。いや、下明るいと思った。また時間の観念が頭の中に響いても止って来ないのだ。考えてやっ

その時期でないことがわかった。
汗をかいていた。油汗。

(教養一年)

或る男

K.H

寮の窓から見える栗松林は、一年間様々な変化を示して今は雑木林になってしまった。間もなく一面の銀世界に埋れて活動が停止するのだと思えば彼は何故かホッとした。しかし来年の春には又生命の躍動を開始するだろう。

彼は今日と藝卒の授業をサボって一日スラックしていた。毎日このような生活を送って来た彼は一般学生とドンくかけはなれて行く自分が不安になって机に向ってゐることに度々あったが、最近ではそれすら下らなくなつて、どう学生ではなく、時の流れに身を任す一個の物体のようであつた。教養時代と云う安心感から始つた彼の兎獐生活は彼を全く自由にした。しかし自由の苦しさに彼は慣けてしまつたのだ。ナンセンズだと罵っていた自分の受験時代が今となってはとてと美しく思えた。

薔りのAはベッドに寝ぞべつて文芸雑誌をヤラくやっている。

「コーシーでどのみに行くかし」と彼はさぞつてみた。定んだ自分の生活、脱却しようと思つても何故か出来ないそれを、一寸でも忘れようとして今までに何回となく発せられた言葉だつた。

彼は十八条に喫茶店があつてと、心もススキノまで出かける、時間のロスなんて全く意味のないことであり、そこには彼等の様な人間を認められる歌壇気があつたように思えたからだ。

二人はいつものバーで五十円のハイボールを飲みながら、停耕した自分達の生活を正統化するための議論を繰返した。どうする事によつてのみ自分達に救われると思っていた。首の学生の林に自分が一個の哲学体系となることを、彼の心の何かを嫌っていた。まるで自分が存在が、如何なる哲学体系とも異つた、全く別のもののであると云う自分の気持に強く信頼せずにはいられたかつた。しかしその林は自分に十分な信頼があるわけでもない。

彼は一時間程ねはつてから、何となく後味の悪い満足感に浸りながらいつものコーンス派夜喫茶へ向つた。カーを明けは隣国にシートがカーンとしていたので彼は失望した。どう話す事となくなつて退屈すること

は明らかであつた。しかし平然とした表情で入口に近い所下り、ある時固を過ぎ方丈について心を悩ました。Aの方が先を下らない齟齬をみつけてペラ／＼紫り出したので彼はホツとした。丁度その時ドアがパツと開いて二人組の女性が勢いよく入って来た。不健康な華緑色の肌、無理に大きく画いたルージユ、暗い所では妖艶なムードをかもし出して酔つた男を引きつけるアイシマドウ、一見してバーがキャバレーを返けた女給である。彼等の斜横に空つて得意そうに紅茶ヒケーキを注文するとすぐに額をクツツケル旅に何かをしきりに紫り出した。そして時々あたり構わぬ大声で笑う。自分達が完全に無視されていると思つと、彼はとて耐えられなくなつた。彼女たちが自分を叱罵していかない事が苦しかつた。

その内に彼女達は、何を入れてあるのかと興味を持ちたくなるほど大きなハンドバッグから中型の封筒を取出して互いに中身を見せ合つていた。数枚の千円札と百円札、それを見た瞬間彼は頬をむぐられた様にカクンとなった。最初はそんな些細な事に驚いている自分がわからなかつた。

自己を殺して各に調子を合わせ、より多くの金を惹上せる事を目標としている彼女達とサラリーをとらつた時には、自分が竹いで来たことを認識し、自己を端

突している。彼女達は生きていゝ人だぞと彼は思つた。自己に満足している彼女たちが羨ましかつた。他人に認識され必死とされる事によつてしか自分の生きていゝる事を感じ得ない自分は、一体何をすると思つた。そして悔なかつた。彼が漠然とそんな事を考へている内に、彼女達はとつと何かを殺しみたいと云つた表情でサツサと出て行つた。彼は未だ死つてゐる生き／＼とした雰囲気を感じた。

Aは先程からマツチの軸をコツコツで発火させようといふ果命になつてゐる。彼はしび／＼と孤寂を感じた。しかし落ちる所まで落ちた人間の守らきがあつた。先程のバーでの道尾感の跡形もなく崩れ去り、徹底的な敗北感と羨望の中に在る自分を快く感じた。彼は急に愉快になつてAを引き立てる様にして外に出た。そして疲しずま／＼とビル街を自分の足音に聞耳を立てながら一歩／＼察へ帰つて行つた。

(歌医学部二年)

納屋

木塚信次

「おめえはや。ゆり阿呆だ」捨吉はしげくと留六の顔を見つめて言った。

留六は白ざしのとれて来る昼下り、納屋の中はむしむしして居た。さきほどからスツキヨツムラでムシ口のワラをちぎっていたよしは「うちと留さんを存かん」と捨吉に調子を合わせる。ひまわりの頭がどのうけにたれている姿ではちやばが救羽遊んでゐる。外界の明るさが納屋の中を一層暗くする。

八太郎おやじのと二ろの若い衆は三人居たが、そのうち男は二人だった。今日は朝の田の草取りをすませた後、八おやじから説教をくった。「米は升廻りしたんは誰や？」八おやじが怒罵るとのだから三人は首を縮めた。三人と、いや八おやじの御りよんさんおつて、中孚に行っているみさちやんまでが年中入ちやじの目をかすめては升廻りをしている。でといつと一升やぞ二ろを町から来る團圓さんに覚る位のことだから見つかつた試しがない。それなのに留六今朝升廻

つたのは七升もだった。留は今日もよく働いたつとりだが、体が小さいし、そのうは八おやじから「留は俺の力の半分となかけん……」と云われて、老母の給金として七百円しか貰ってない。

留は三の煎里を出る時は、少し金を貯めて飯ごさんを買うべきの足しにしたいと思っていたし、はあちやんにも「今更解つて来る時は、まんじゅうは買うてきてやるバイ」と言つておいたのに、ゆうべ 捨吉と一緒にイロハ屋でおまごを買つたら、今日から値上げしたさうで五百円取られたし、その時に飯んを種代として別に百五十円も取られたので「俺は今腹が立つて居る」と言つて、飯んを時々の幸ばかりくりかきして居た。

「ぞけん腹の立つてるなら俺とけんか決しようか」イロハ屋から出て来るなりさう言つて捨吉が留を叩きりとどろけた。捨はイロハ屋のお女ごのサービスが良くなかつたので、やつゆり腹を立つてゐた。それなのに留のやつがまだ「俺ア腹が立つてるせ」と言つてはかりいるからムカッと米をわけた。女ぐられたので留は黙った。やはり捨の方が強いかから恐ろしかった。

それやこれやで留は、今朝起きた時まだ腹を正でいた。まだ誰と起きていなかつたが、一人で表に出たらちよと團圓さんが来るのに会つたので「米は買う

てやんなせいやしと云つたら「よかバイ」と云うので
一升ますに六七杯失敬したわけだ。これではあさんに
まんじゅうを貰つて帰つたら「留六はゆきとんじやし
正直じやし」と云つてほめてくれるだろう。

ひるまえ、三人が田の草取りに行つてゐる時、八
おやじが米俵の中が減つてゐるのを見つけてしまつた。
八おやじは「お前たちのレンタイセキニンやし」と言つ
て、今日は午後から里に帰つてよいことになつてい
た三人を納屋の中押し込め、外から鍵をかけてしま
つた。

x x x x

「おめえはアおだし、捨首はまた留六に言つた。しめ
きつた納屋はさつきよりもっとむしむししてゐた。少
しはだけた野良着のむねのあたりからにじんである汗
の玉を一粒／＼指の先でぬぐいながら「うちア捨さん
の才が好さだわしよしと説いた。

「使ア腹が立つし留は口の中で、誰にも聞えないう
うにふつく／＼つふやいた。

(救養一年)

エイラム君の秘密

門奈 駿

私か十才で、まだ世の中が竹藪的及杜鰓とに漸ち、
生命と云ふものが薄くしく神秘的な夢であつたあのた
のしかつた二三日の或る日、私以外の誰からもイカして
いると思われている従兄のマウラーが、朝の四時頃
家にやつて来て私の部屋を叩いた。

「エイラム」と云う声に床から跳びおきて窓を見て
私は、自分の目が色じられなかつた。夏ではあり、程
なく夜も明けようと云う時刻なので、夢ではないと解
る明るさなのにマウラーは美しい白馬に跨つてゐる。
目をこする私を見て、彼はニヤ／＼笑ひながらアル
×ニヤ語で云つた。

「へうん。馬なんだ。オメエは夢を見てるんじやない
よ。乗りたけりや急いでくれ」

間違つて井に生をうけた人間の所で、私はマウラー
トが一番生きてゐることを乗しんで居るのを知つてい
る。かこれは想像以上の出来事だつた。

私の幼時の記憶に殘るとの云ふ馬であり、私の
一番の憧れと云ふは、馬に乗る事であつた。

我々は食しかつた。我がカローラニアン家のどの一
族も、全く途方もなく、滑稽なくらい貪しい生活をして
いる。金が何処から入るか一家の老人たちでさえ知
らなかつた位だ。然し乍らとりわけ大切なことは、我
が一族が正直だと云う事では有名なことだ。我々はま
さ誇り高く、正直で、善悪はその後で判断する。

私はマウラードがこんな正義な馬を買えない事と、
若し買えたとしても彼は盗んだに違いないと云う事
と知っていた。そこで私は彼が盗んだなんて考をな
し事にした。

カローラニアン家の者がドロホーであるわけはな
いと。

わけのわからぬ複雑な気持ちで私は従兄と馬を交互
に更替めた。

「マウラード」と私は従兄に云った。

「へ一体どこでこの馬手に入れたの？」

「へ乗りたきや宛から出て来い、彼は素気なく云っ
た。

乗りたくてたまらないので黙って馬を拜借するの
と、金などを盗むのとは同じではない。親外……尋
分……こら云う事は盗みにはならないだろう。

就者が馬に夢中なら、私と従兄のこの志を方をド
ロホーなどとは思いはしないうら。我々がこの馬

を売るなんてそんなことをする気遣いは全然ないのだ
から。

「へ一寸善物を貰うからね」

「へうん、だけど大急ぎだね」

私は慌て、善物をみつかけると宛からとび出し、白
馬の背に従兄と相乗りになった。

私たちはワルナット街道の町はすれに在んで居り、
家の後は畑、ストウ園、果樹園、海老耕や田舎道だっ
た。三分とたぬうちに我々はオリーンの街道に出、
馬は走り始めた。

空気が甘く新鮮だし、馬の走る感じは実に心地よい。
マウラードは歌い出した。いや私は彼がうなづいてい
るように聞えた。

どの家系でも誰かオカシな素顔を持っており、我
が一族のオカシな素顔の後継者は生れつきマウラード
だと思われている。彼以前はサン・ジョイン溪谷の、
大きな口ひげで有名なコホスロー小女さんがどうだ
った。激しい気性でイラ／＼して短気なので、「何と
思かぬぞ。氣に掛けることあぬぞ」と云う誇り文句を
怒鳴って誰の口をも黙らせた。

嘗て赤屋で口ひげを刈っている小父さんのところへ
息子のエイラクが家が火事だと八丁と駆けつけて知らせ
た時、この尻取りなコホスロー小父さんは椅子に

かけたま、何と悪かぬぞ。氣にかけることあぬえしを救鳴った。「だけとお前さんの家が火事だつて息子さんは云つてゐるでせしと永屋が云うと、コホスロ一ウ小文さんは云つたものだ。「うるせい／＼とうわかっけ。わしは悪かぬえと云つてゐるんだしと。

私の従兄マウラードの父親は突に律義なメオラスだが、在田の人はマウラードがコホスロ一ウ小文さんの氣貞を受け継いでいると思つてゐる。男は自分の鬼子の肉体の父親ではあつても同時に精神上も父親であり得るとは限らぬ。私の種族はさつと二人を具合なのだ。

我々は馬を乗りまわし、従兄は歌つた。その挙句マウラードが云つた。

「おい降りろ、おいらは一人で乗りたいんだし」

「僕と一人で乗せてくれる」

「ぞりや馬次才だ。降りろよ。おいらが馬の扱い方を知つてゐるって事なれるぞ」

「お人なら僕と同じ林にやつて見ろよ」

「おめえが大丈夫ならい、がしと彼は云つた。

「ととかく降りろ」

「うん、だけと僕にと一人でやらせてくれるの忘れちや嫌だよしと私はせかんだ。

私は降り、マウラードは腹で馬の腹を蹴るなり「バ

ジャー走れしと叫んだ。馬は後肢で五ち上り、大きな鼻息をするし猛烈な勢いで走り出した。マウラードは馬を駆つて灌漑溝まで乾草畑を横切り、溝を渡つて五分前に汗びつしよりになつて突つて来た。

太陽が昇り始めた。

「今更は僕の番だよ」馬の背にとびのつて私は、しめしめらゆる感しさを味わいとうしようじなかつた。

「馬の腹をケツト使せ。荷をスル／＼してゐんだ。在田の人が起きて竹き出す前に馬をつれ突さんと云ふんだぞしと彼は云つた。

私は馬の腹をケツト使した。一二変舞を鳴らすと馬は後肢で立ち上り、駈け出した。私はどうすれば良いのかわからなかつた。灌漑溝のオへ行かかわり、馬の奴はスイクラン・ハラビアンの葡萄酒へと駈け、葡萄酒を二びごぞぞ。私かしがみついているので、奴は私を授り落すまで七本以上の葡萄酒をとんだ。それからヒヨンヒヨンヒ逃げて行つた。

マウラードが道を走つて来た。

「おいらおめえなんが氣にしちやいぬぞ。馬を探さなきや。おめえはこの道を行け。おいらはこつちから行くから。馬に出会つたらさつとしとけよ、おいらが行くからし」

馬を廻つてはしついで突すには三。今とあちこち走り

まわらぬ奴ならなかつた。

「さて来りヨ。皆起き出して来るぞ」

「僕も立ち出すのしと私がきくと、

「あ、馬の奴をどとに決すか明日の朝迄隠しとくかどっちかだ」と一寸も困つた林子がなかつた。で、私は彼が馬をかきす心配はないと思つた。

「どにかくすのし」おいらはちやんといふ所を知つてゐんだ」

「いつからこの馬盗んでるのし彼がこの所毎朝早く馬を乗りまわし、私が乗りたかつていたのに気が付いて今朝突然やつて来たんだなとまう考えが急にひらめいた。

「馬が盗まれた女んで誰か云つてゐるかい」

「どにかく、いつから毎朝馬に乗つてゐるのし」今朝からさしと彼は答えた。

「本当し」勿論ウソさし彼は答えた「だけど若し見つかつたらどう云うんだぞ。おいらはち今朝から馬に乗り始めたつて」

「うん。わかつたし私は呑みこんだ。

彼は皆てフエトウアジアンと云う百姓が自慢していられた鞍轡園へ馬を解かじやつた。その納屋の片隅の馬小屋には焚火とムラサキウマゴヤシがあり、茂白と馬の在んでゐる気配がした。

私たちは夜路を逃げた。

「馬をおればどうまく振うを、どう切しいことじやねえんだしと彼は道々話した。初めは馬の奴気狂いのように走つたんだ。けどどさつきまつたぞ。おいら馬の手をかけ方を知つてゐるんだ。それで今じや馬に悪い通りにはやらせるんだ。馬はおいらの気持がわかるんだぞ」

「どう云うふうにするのし私はどすねえ。

「馬はおいらと譲り合つたんだし」

「ふん。だけどどんな譲り合なのし」

「簡單だ。正直な譲り合なんだし」

「ふんし私ばうなつた。僕も君と同じに馬と譲り合はなりたいな」

「おめえはまだ小さいんだぞ。おいら及び之に十三になりやあとうするかわからあ」

私は家に帰り、おいしい朝飯を食べた。

その日の午後、コホスローウ小父さんがコーヒーと煙草をマりに我が家へ来た。彼は玄関に坐り、ゆつくりとコーヒーを飲んだり煙草を喫つたりして故郷を偲んでいた。

その時おとなしいアルメニア人の百姓ジョンパイロが来た。私の母はこの孤独な訪を訝異にコーヒーと煙草をすゝめた。彼は茶をすゝり、煙草を送いてゐるか

した。それから悲しげな顔をしたと、おとむろに口を閉じた。

「先月盗まれたおらの白馬はまだ返って来ないんだ。おらお父がわかんねえし」

「ホスロー・オ小父さんは幾々いらだたせてき取鶏り出した。

「馬がいなくなっただって、むしろは皆圓を失したんだぞ。何で馬をんかに懸ぐんかいし」

「ギリヤ街に在んでる親にやよいかど知んねえ。だともおらの馬車はどうなるね。馬をしいや馬車はどうにもなんねえし」

「何と親に掛けることおねえし」とホスロー・オ小父さんはやった。

「おらお此処まで十マイルと歩いたんでしジョン・バイロは云った。

「お前はおやんと足があるんじや」

「左足が痛むんでさあ。それにおの馬にマ六十ドルと掛ったんでし」

「気に掛ることおねえ。金なんぞ喰喰えどしおとをしいジョン・バイロは何と云えなくなり、立ち上ると、とどく出て行った。

私の母は、「あの人はおとなしい人だよ。あんを大さな男でどきつとホームシックに掛ってるんだよ。こ

りや確かだね」と説明してくれた。

百姓が去るとすぐ私は従兄マウラーの所へかけつけた。

「どうしたんだい」とお百姓のジョン・バイロさ。あの人が家に来たんだ。白馬の事云ってだよ。あの白馬一月も隠してたんね。ねえ、約束してよ、僕が乗れるまで返さないってし」

「おめえが一人で乗れるように返るまで一年とか、らあし」僕をち一年ぐらい馬をかっておけるよし」

「何だって、おめえはカロー・ニアン家のこのおいらに盗めつてのか。馬は本当の持主にちやんと返さないとやいけないんだし」

「じや何時返すのし」

「かくとと六ヶ月以内だし」

二圓圓という私の私と従兄は、毎朝早く荒れ藪園から隠している馬を引き出して乗った。そして毎朝馬の奴は私が一人で乗る番になると、轡轡や小さな水を蹴んでは私を抛り出し、走り去った。それにと均らば私は何時かはマウラーの棟に上手に乗りこなせると云う希望を捨てた。

或る朝我々がフェト・ニア・ジアンズの荒れ藪園へ馬をしまいに行く途中、町に行く百姓ジョン・バイロに会ってしまった。

「おいらに話させる」とマウラーは云った。「おいらは百姓と云まくやれるんだから」

「お早ようございます。ジョンバイロさん」彼は百姓に云った。

お百姓は又のあく程熱心に馬を見つめた。

「お早よう、おらの友達のマ夫さん達。お前さん達の馬の名は何てんだね」

「元氣着て云うんです」と彼等はアルメニア語で云った。

「ほう、さいつあ良い名を付けたとんだな。おらが前に盗まれた馬とこの白馬とは少し分儀てるんだがな。ちよいと口の中のさいても良いかね」

「うん、マウラーは、いとど氣易く答えた。

「歯が一本くまっくりだあ」お百姓は口の中をのさき二みながら云った。「おんた等の御両親を知ってなきや、この馬がおんたと盟って云うだが、おんた等の家が正直で有名をんだあ、おらあ良く知ってんでなあ……さうだ、この馬あおらの馬と双子なんだべし」

この聲い承い百姓は自分の氣持より目の方を信じながつていた。不認識さうな顔をしながら「おらのちっちやな友達の、さいなら」と云った。

「あは、」彼等が解らぬに答えた。

次の朝我々はジョンバイロの騎馬園に馬を連れて行

き、馬小屋にまこと入れた。犬が数匹我々にジャレついた。吠えると思つたのでマウラーに大に云うと、「他の奴等ら吠えられるさうが、おいらは犬とどうまくやれるんだ」と平氣などのだ。

彼は馬の首に腕をまき、自分の鼻を馬の鼻に懸くこすった。それから馬小屋をばなれた。

その日の午後、馬車に乗ったジョンバイロが私の家に行つて来た。そして私の母に、盗まれた又はヨッコリ返つて来たあの白馬を見せながら在狂を声で云った。

「おら、どう考えてい、かわかんねえ。この馬お前より丈夫になつたし、氣性までとぐつとよくなりやがってなあ。おらお神林に感謝せぬばなんねえ」

玄関にいたコホスロー文さんが、いらくしは

林子でやつて来て吹鳴った。

「静かに、静かにせい。お前さんの馬はもう戻つて来てるんだ。氣に掛けることおねえに」

あとがき

狂想的で印象的で兼天的な Aram 少年を主題とし

た William Carey の短編集 "My Name is

Aram" "The summer of the white bear-

ful horse" を抄訳してみた。原文は(以下)と

入ですぐ書き出す(筆談の簡潔流暢さ)のであるが、

拙い私の家ではその流麗さを表現出来なかつた。又此
教の關係もあり人物の性格、背景などを割愛したところ
が多い。作中の人名はアルメニア語であり、適当に音
変した。蛇足を加えるなら、エイラム少年たちはアル
メニアからのアメリカ移民である。

二の小岳が離家されているのを私は知らない。馬術
部員には英文科の学生と吾り、烏許がましい鬼いはし
たが、私とち馬乗りにとって何か感じ得るところがある
と思い、ニノに御紹介した。誰かが既に離家出版でも
されていたら私は文を揃って置れたい。

(医進二年)

北大馬術部正代部員住所録

永井 一夫	才一代部長	札幌市南二条西一丁目㊦㊧㊨㊩	北大名誉教授
高松 正信	才二代部長	東京都古田谷区松原町四ノ二九四	〃
黒沢 亮助	才三代部長	札幌市北一条西二丁目㊰㊱㊲㊳㊴	〃
太素 泰光	現部員	札幌市南一条西二丁目㊵㊶㊷㊸㊹	北大理学部教授

氏名	卒業年度	学術科	場住所	勤務先
中野 友二郎	四	農芸	新潟県高田市南城町一ノ三三	堤立長岡農芸高校
平山 常介	〃	工機	新潟市余部町下九四七ノ二寿山住宅	飯野産業KK舞鶴造船所
岡谷 克市	五	農畜	清河郡清河町西舎官舎	農林省日高種畜牧場長
中谷 勝彦	〃	工機	東京都杉並区清木町二一六	飯野セル飯野重工業KK顧問
愛甲 俊幸家	六	農実	福島県徳大郡平野村	福島県園芸試験場長
岩垣 駿夫	〃	農畜	東京都八王子市高倉町一ノ五五三	東京都愛馬組合
河崎 秋三	〃	農畜	札幌市手稻町窟立一九五	北大農学部教授
(旧姓三谷)	〃	農畜	空知郡喜良野町東四条南四丁目	同業
松本 久喜	〃	農畜一	東京都大田区北千束町七七一	高津製紙KK
加藤 英夫	七	医	スラシル在在	業業
永松 四郎	〃	農畜一	盛岡市笑瓶町二九ノ一	岩手県農業経済連畜産局
藤原 金太郎	〃	農畜一	札幌市南五条西二丁目	田畑産婦人科病院
武田 朝男	八	医		
田畑 武夫	〃	医		

福岡	小島	羽島	宇津見	武田	宮崎	和田	田之上	後藤	本藤	佐藤	下飯坂	鈴木	渡邊	高野	永井	長井	(旧住 櫻谷)	古谷	吉本	福島	阿部
那英	正英	栄治	千之助	裕幸	利昭	久晴	久英	善一	教一	隆	敏夫	貞一郎	保	重頼	晴男		昌司	正	務	一朗	
一九	二〇	〃	二一	二二	〃	二六	二八	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	二九	三〇	
製	製	工	製	垂	工	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	工
製	畜	土	畜	地	機	畜	水	飲	畜	畜	畜	畜	畜	畜	飲	水	水	畜	畜	畜	機
札幌市豊平五条十丁目道管及ノ	東京郡中野区驛の宮一、二、三	旭川市宮下通七	札幌市南六条西二。丁目	東京郡杉並区阿佐ヶ谷六、三、八	堺市西一条北一丁目	函館市千代ヶ谷町一、一	札幌市山田町二〇九七	札幌市南五条西一五丁目	札幌市南一六条西八丁目	静内郡静内町御園	網走市美幌町取二条北一丁目森方	札幌市北二七条東二丁目	樺津郡中樺津町道管試根室支場内	岩手県久慈市中ノ橋	牧田市四条町四条	埼玉県浦和市別所西野台一三一〇	空知郡栗沢町立病院内	紋別市鴻之舞清明寮			
道徳務訂問券企画本部調査課計画係長	東京郡經濟局製林部製業改良係	国鉄旭川鉄道管理局施設部工事課長	北大理学部講術	文一物産KK機械輸出部	堺市十勝支庁技術	北大水産学部助手	札幌市山田動物園飼育係長	北大製学部助手	北大曰高突驗收場助手	美幌高校	北大製学部助手	北海道製業試験場根室支場	雪印乳業KK久慈工場	大阪魚市場KK	古谷製業東京工場	富城製業試験場	北大病院産婦人科	住友金屬鉱山鴻之舞製業所			

鍛田正人 (自姓脚象)	田中浩	正富之	石塚和夫	大久保利彦	岡本光	加藤本	加藤昌太郎	芥藤成俊	千田哲生	三井康	荒川清	榎本幸人	岡部滿雄	芥藤英	宮沢寛	伊藤直亮	栗原直	柴田久男	松田林
----------------	-----	-----	------	-------	-----	-----	-------	------	------	-----	-----	------	------	-----	-----	------	-----	------	-----

三〇	〃	〃	三一	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	三二	〃	〃	〃	〃	三三	〃	〃	〃
----	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	----	---	---	---

農畜	工台	理動	歌	歌	製生	歌	理物	製經	歌	製植	經	理植	製畜	産	製林産	歌	理動	工鉦	工電	医業
----	----	----	---	---	----	---	----	----	---	----	---	----	----	---	-----	---	----	----	----	----

札幌市北一四糸西一五丁目白土才	札幌市柴水西町一。	札幌市北八糸西一八丁目	新冠郡新冠村製業共済組合内	岩見天市八糸西二丁目工藤幸市方	札幌市北一五糸西一丁目①②③④⑤⑥⑦	神户市矢野区熊野町五丁目五九五	横須賀市小泉台同下内	岩見天市四糸西五丁目及川才	東京都市田谷区玉川用賀町三一馬車公苑公正寮 馬車公苑在生研究室	札幌市北一五糸東三丁目	札幌市南八糸西二四丁目	千才市柴町三丁目三浦才	札幌市琴似町二四軒三三九 中根才	富山市不二越町六	横須賀市田浦町二、八四	東京都北区西原動物医藥品検査所	札幌市北一七糸西六丁目宮殿才	宇都市	札幌市北一四糸西二丁目北学寮	札幌市北一四糸西一四丁目三一
-----------------	-----------	-------------	---------------	-----------------	--------------------	-----------------	------------	---------------	---------------------------------	-------------	-------------	-------------	------------------	----------	-------------	-----------------	----------------	-----	----------------	----------------

札幌市北一四糸西一四丁目三一	札幌市北一四糸西二丁目北学寮	宇都市	札幌市北一七糸西六丁目宮殿才	東京都北区西原動物医藥品検査所	横須賀市田浦町二、八四	富山市不二越町六	札幌市琴似町二四軒三三九 中根才	千才市柴町三丁目三浦才	札幌市南八糸西二四丁目	札幌市北一五糸東三丁目	札幌市北一四糸西一四丁目三一	札幌市北一四糸西二丁目北学寮	札幌市北一四糸西一四丁目三一
----------------	----------------	-----	----------------	-----------------	-------------	----------	------------------	-------------	-------------	-------------	----------------	----------------	----------------

防在 大学応用物理学教室
 東京 都文京区 巴 雅司 〇〇〇
 十〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇
 北海道庁畜産課 ③④⑤⑥
 北海道的畜産課 ③④⑤⑥
 不二越鋼材工業 KK
 農林省畜産局在生課
 北大理学部大学院
 通産省銚山基準監督局
 札幌医大助手

渡辺俊弘	三三	工化	東京都新宿区下荻合一ノ四六。	北海道炭矿汽船KK
			目白北友寮	

(死亡)

比村憲吉	元肥后将校	又田鶴松	四・工・鋳	貞鍋雅彦	五・製糖二
岩崎扇一	一〇・工・電	龜堅 稔	一四・製・美	水田敏雄	在学中死去
下糸 親	一五・製糖一	石川正吉	在学中死去	水倉 寛	一六・工・土
小林 敏平	一七・製糖化	福本 途夫	一七・理・化	山村 亨	二〇・製糖

九鬼 敏之助	八・製糖化
左藤 誠 龜	一五・製糖美
山本 義 則	一六・理・化
安達 信 一	二三・医

(現部員)

氏名	学年	学部科	現住所	帰省先	出身校
鎌田 正人	四	法	市内北一四条西一五丁目白土方	浦河郡浦河町西樺別	創路湖陵
樋口 正明	〃	法	〃 北一条西二丁目黒分③④⑤	東京都田谷区上馬町二ノ一三	新橋高
生田 勝一	〃	文	〃 北一条西八丁目檢影寮④⑤⑥⑦⑧⑨	旭川市宮下通三四丁目右六号	旭川 秉
菅 榮 照 雄	〃	文	〃 北一条西四丁目	同上	札幌 北
千 葉 幹 夫	〃	文	〃 北一条西七丁目教習寮③④⑤⑥⑦⑧⑨	岩手県胆沢郡前沢町白山	一関 一

土井 敦	中村 美幸	村山 哲	栗天 便太郎	片山 静子	佐伯 雄二	田中 勉介	長谷川 邦夫	本橋 幹久	森本 悌次	門奈 駿	大場 善明	河原 勉夫	佐藤 典子	瀬田 信哉	高橋 陽	高階 子	泉 邦男	湯浅 正之	寺田 亨	左藤 匠夫
四	〃	〃	三	〃	〃	〃	〃	〃	〃	二	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
製 畜	経	経	水 増	文 英	製 畜	製 林産	法	製 畜	製 林産	医 道一六	文 史	理 地	医 道一五	製 林産	医 道一六	医 道一五	獣 医	製 畜	工 程	医 道一五
市内南三条西七丁目 菱島方	〃 南二条西二丁目 ①タウタウ	市外豊平町美園一区 ④ヨラクク	函館市旭陰町一三 啓徳学校	市内北二条西二三丁目	〃 北五条西九丁目 青年寄道会	〃	〃 北一八西五丁目	〃 北五条西九丁目 青年寄道会	〃	〃 北一七条西二丁目	〃 北一七条西二丁目	〃 北七条西一二丁目 米沢寮	〃 北七条西一三丁目	〃 北九条西一九丁目 星野才 ③タウタウ	〃 北二五条西五丁目 北大セラー ④タウタウ	〃 南一四条西二丁目 小林才	恵迪寮	市内北三一条西一丁目 大竹才	恵迪寮	市内北一二条西二丁目 泷泽寮
鶴巻市島崎六ノ五	同上	同上	市内南一条西一七丁目	同上	奈良 泉福寮市山之坊	樺岡 泉清水市高代町六	同上	鳥取市上町二〇ノ一	東京 都島筋区奥戸本町一三八四	横須賀市追浜町二ノ一九	同上	名古屋市東区栗芽野町二ノ七	同上	大阪市東区吉区平野三十步町	大坂市丹波南町二二	鎌倉市十二所三三	神戸市長田区寿王寺町三ノ八	高崎市新保田中町五三〇	東京 都中野区盛宮一ノ二〇一	岡山 浜西大寺本町一三四二
西舞鶴	北星学園	札幌南	札幌西	大 森	清水東	札幌北	鳥取東	独 校	横須賀	札幌北	札幌西	藤学園	天王寺	室蘭米	酒泉女子寮	兵庫高	前橋高	大泉高	才六高	

佐司守	二	医道二五	市内北一二条西三丁目芳原寮	網走市新町二七	網走同陽
上野男	一	文類二	北九条西二丁目井波方	斜里郡斜里町本町三九	斜里
大坂弘	一	理類七	鬼道寮	高知市北奉公人町一六六	小津
小山毅	一	理類六	〃	東京都大田区田園調布一三三三番地アート	新濱
木塚信次	〃	理類六	〃	下関市長府町前八幡五五八	豊浦
小島杏介	〃	本業類七	汝羊寮	東京都港区芝白金塚町二	雪ヶ谷
沢田昭	〃	理類五	南一 条西二丁目	同上	衣櫛南
玉天一	〃	理類四	南一六条西八丁目	同上	札幌南
千葉祐之	〃	理類八	北一七条西三丁目柳田方	空知郡上砂川町朝陽台二ノ二八	砂川北
鶴見好博	〃	理類四	北二八条西六丁目平野方②③④	静冈市太田町四三	静岡
中村寿孝	〃	本業類八	青年寄宿舎	室蘭市岩盤町三一	室蘭米
玄畑暢夫	〃	理類四	北六条西一二丁目稻垣方	滝川市香里九六四	大手前
森弘事	〃	理類九	北一七条西三丁目名田方	愛知県香流郡高沢町高沢校路六六	川谷
森田生	〃	理類五	北一三条西二丁目②③④	同上	札幌西
四柳鶴久	〃	理類七	南一八条西二丁目玄崎方	神戸市須磨区須磨浦四ノ八九	長田
渡辺正朋	〃	本業類八	鬼道寮	川越市郭町二〇七	浦和町

この名表は、同窓会名表を参考として努めて改正したつもりですが、不備な点、或は変更等ありましたら、当都迄お知らせ下さるようお願い致します。

編集後記

音となく粉雪が舞い落ち、ストーブのまわりで煙を
を感じるころ、私たちは、はや雪解けの馬場へ心を
とらせています。

我が北大馬術部は、二、三、三年、めざましい成績
を残し、戦後にひける一つの黄金時代を築き上げた
といわれています。しかし、今日あると、先人たちの苦
難を除いては論ずる事は出来ないうでしょう。

部報も、創刊以来四号と回を重ね、とうやら軌道に
乗って来た感じがします。年刊という悪条件ではあり
ますが、これを校友会に、部報を、先輩と現部員の間の
かけ橋として、また、部員相互の話し合いの場として
と、お互いの感情に融れ合ふ、とまではいかなくとも、
何かさのよくなものを用意していきたいと思っております。
過ぎし日の思い出や実社会での経験談、或はまた
馬を通じての笑話の話題等、当部宛お寄せ下されば幸
に存じます。

未熟な編集ではありますが、皆様の内容豊かな原稿
のおかげで、とうやら発行出来る運びとなりました。
昭和三十三年冬の締括りの意味も含めて、馬術部の現
況の芝罘が表わされていければ、これに勝る喜びはあり

ません。

部報発行に際し御寄稿下さった方々、及び編集に御
協力してくだされた小山君に、この紙上を借りてお礼を申
上げます。

(吉田亮)

札幌市北八条西五丁目

北大体育会内

北海道大学馬術部